

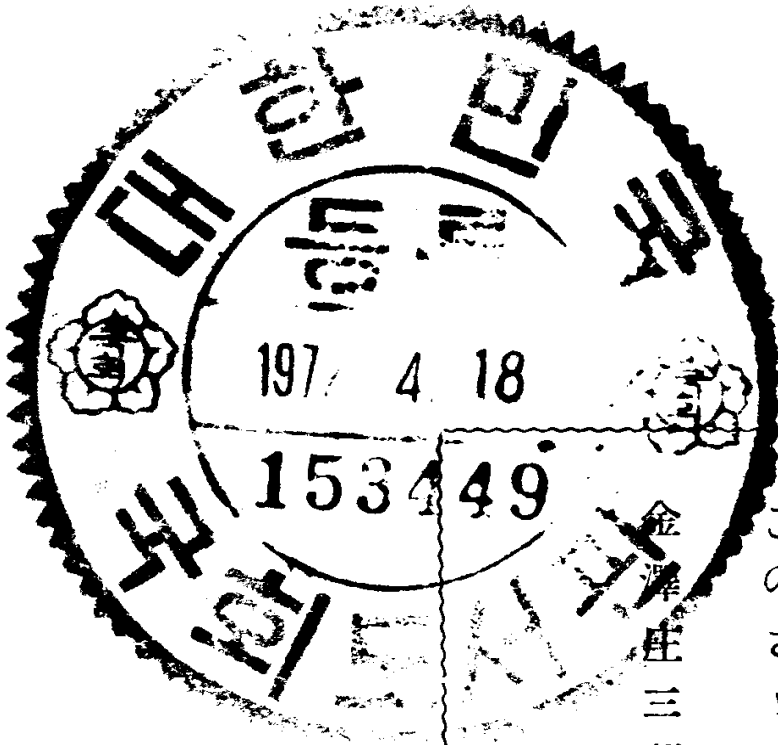
471.8
028/2

MON03197060254

奧山仙三著

會話 語法
朝鮮語大成

京城 日韓書房發兌



このさゝやかなる努力のあこを恩師
金澤庄三郎博士の座右に捧ぐ

— 仙 三 —

桑槿一家

天山五

序

東洋の政局を眺め、更に眼を世界の風雲に轉するとき、吾々内鮮人は一心同體、協同戮力以て共存共榮の實を擧げねばならぬ事を、益々痛感せしめらるゝものがある。然るに、動もすれば、内鮮人間意志の疎隔を來たし、感情の衝突あるを屢々耳にする。其の原因を探究すれば、種々の事由はあらうけれども、兩者間に言語・風俗・慣習等を異にするより生ずる誤解・不徹底に基因するものが最も多い。而して、是等の障壁を芟除し、和氣鬯鬱たらしむるには、先づ、相互に言語を充分に了得することより出發するのが第一の捷徑である。即ち、内地人は朝鮮語を、朝鮮人は國語を習得するは、兩者の共存共榮のための第一歩であり、而して、是れが凡べてのキーであると確信する。從來朝鮮人に對して、國語普及を教育上重要な目的の一とし、又内地人官吏には、朝鮮語習得を極力

獎勵せる所以のものは、皆茲に出發してゐるのである。

吾が友奥山君は、朝鮮語を研究する事年久しく、今回其の一斑を上梓せらる。君が朝鮮語に堪能なる、又眞摯なる研究的態度には、常に敬服せる所なるが、本書成るに及んで、益々其の感を深からしめられたのであつた。余が、好學の士に本書を推奨する所以のものは、單に、著者との知己的關係ばかりに因るものではない。

昭和三年陽春

朝鮮總督府學務局長 李 軫 鎬

序

序

語學習者に對し、最も適切なる指針として、本書を推薦せんとする所以である。

昭和三年四月

文學博士 金澤庄三郎

序

凡そ兩民族が互に相信じ相愛して、以て其の福祉を増進せんが爲には、固より種々の方法を要するであらうけれども、恐らく言語の疎通を圖るより急なるものは有るまいといふことを斷言して憚らぬ。況んや、内鮮兩民族の如き、渾然融合、以て一國家を形成せるの今日に於てをやである。

畏友奥山君は、在鮮久しく、樞城の風習及言語に通曉せることは、世人の齊しく知る所であり、君が眞摯尋究の志、人並以上に堅いことも、亦夙に敬服せらるゝ所である。

君は、平素劇忙の職務に當りつゝあるに拘らず、尙其の餘暇を以て「朝鮮語大成」なる一書を編せられた。

該書は、頗る浩瀚であるが、其の篇を分ち、章を立て、節を定めて、剴切に

説いた努力の結晶は、恐らく、這種僚著に於て、之に比肩するものはあるまい。

余は、先づ時運を促進すべき一大提供を爲されたることに對し、謝意を表すると同時に、斯る有益なる著書の公にせらるゝことを喜ぶものである。

昭和三年仲春 於倭城臺

朝鮮總督府通譯官 藤 波 義 貫

序

内地人が「ヨボ」と呼び掛けると、朝鮮人は「ネー」と答へて此方を向く。内地人以爲らく、「ヨボ」とは朝鮮人の代名詞であると、依て常に朝鮮人を呼ぶに「ヨボ」、尊敬する意味で「ヨボさん」といつて平氣である。然るに、意外にも朝鮮人が内地人から「ヨボ」と呼ばれるのを、侮辱の言葉と解して腹を立てるのである。根を洗つて見ると此の「ヨボ」といふ言葉は「此處を見られよ」即ち内地語の「もしく」又は「ちよいと」などいふ言葉の如きもので、「もしく」、「もしくさん」では朝鮮人の代名詞にならず、それかといつて朝鮮人が腹を立てる筋合のものでもない。而も内地人が「ヨボ」といへば忽ち朝鮮人の感情を害し、一語彼我の間に溝を劃するに至り、些細の言葉遣ひで、内鮮の融和提携を妨ぐる重大なる結果を齎らすのである。此の一例に徴するも、内地人の朝鮮語研究は、等閑

に附すべからざることである。

私は朝鮮に在る一般内地人——尠くも内地人官吏をして、朝鮮語を學習せしむる必要を痛感し、曩に判任官見習及雇員採用試験に、朝鮮語の一科を加ふることを獻策して、其筋の容るゝ所となり、又朝鮮語獎勵試験制度の制定にも微力を致し、曾て伊藤韓堂氏に勸めて、講義録を發行せしめた事もあつた。要するに朝鮮語の修得は、學術的にも實用的にも必要であり、殊に内鮮の融和提携の忽せにされぬ我國としては、統治上喫緊の事に屬するにも拘らず、其の普及並學習成績の概ね良好でないのは、之が講究に資する完備した著書提供の思はしからざること亦確かに一因であることを、常に遺憾として居たのである。

此の秋に方り、畏友奥山君が朝鮮語大成を著された。君は東京外國語學校に於て朝鮮語を專攻され、渡鮮後斯學の研鑽に努むること多年、今や蘊蓄を傾倒して此の大著を成す、洵に欣ぶべきである。試みに内

容を一讀するに、豫て私の求めつゝあつた所と略々一致し、其の編纂振は麤より細に、簡より繁に入り、極めて周到の注意が拂はれてある。想ふに、本著は朝鮮語研究者の爲に裨益する所多大なるべく、私は切に其の上梓を祝し、朝鮮語學習者に對して本書を薦むるものである。

昭和三年四月十五日

京城大和町官舎に於て

朝鮮總督府通譯官 田中徳太郎

新羅國遣級食金貞卷朝貢（中略）、本國王令齋御器
貢進。又無知聖朝風俗言語、仍進學語二人、同五
年令美濃武藏二國少年每國二十人習新羅語。云々

（續日本紀）

上梓に當つて

◇言語は、思想の表現であり、風俗習慣の反映である。或る國・或る民族を知るには、先づ以て其の言語を學ぶ必要があり、また其の言語を通じて、之を知ることが第一の捷徑である。

◇我等が、朝鮮と其の民族とを完全に理解せむるには、先づ第一に朝鮮語に通ぜねば駄目である。我等内地人が、一人でも多く朝鮮そのものを理解するにこそ——朝鮮語に通達することが、即ち内鮮關係の諸問題、否内鮮の根本問題を解決する前提となるべきことを私は固く信ずる。

◇朝鮮語を學ぶ者の多くは、單に、日常の用務を辨ずる方便としてのみ之を學んで居るが如き弊がある。それならば、朝鮮人に國語の普及相當遍ねき今日、我等に於て何を苦しんで無用の勞力を費す必要があるかといふ議論も成立つ。頭の淺薄の人間には、往々さうした説を唱へ、朝鮮語研究の眞意義と使命とを、全く没却して居る輩もある。

◇然し、我等の朝鮮語に通ぜむと欲する所以は、希くは、之に依つて、眞の朝鮮及朝鮮人といふものを理解し、而して、新しい同胞の心の琴線に觸れ、その心裡を把握したいと念願するにある。

◇我等が、旅先きに於て、偶々故郷の言葉を話す人に遇つた時の感じはさうであるか、それがよし他人であらうと何であらうと、先づ第一に『あなたは何處そこのお方でせう、實は私も其處の者

です』といふ言葉が、思はず口をついて出て来るではないか、そして茲に心と心との固い握手が出来るのである。同じ内地人同志ですら之だ、我等が朝鮮語を以て朝鮮人に對した時、果して是等同胞の心裡が如何であるかを考へて見やうではないか。

◇朝鮮に於ける外國人宣教師が、何と言つても、多數の朝鮮人間に隱然たる勢力を有し、牢として拔くべからざる地盤を有するのは、抑も何に基因するか。言ふまでもなく、それは彼等の自由に操る朝鮮語の力である。私は斷ずる。爲政者よ、教育者よ、宗教家よ、實業家よ——一般の内地人民衆よ、先づ朝鮮語を學べ、然して後、朝鮮を語り、朝鮮人を談ぜよ。

◇私が抑も本書の編纂を企てたのは、大正六年即ち十年前のころである。朝鮮總督府は、その年初めて、朝鮮人教育に従事する内地人教員の爲め、三箇月の長期講習會を開設し、専ら朝鮮語を授けることとし、爾後數年間同じ施設が繼續された。その間、私は講師の一人として、終始是に係したのであつたが、その際、講習用の臺本として作つたのが、即ち朝鮮總督府編纂の名義で最も廣く行はれた『朝鮮語法及會話書』それである。

◇然し、この書は、何分僅か三句餘りの間に、ホンの講習用として急遽作つたものなので、私としては、もこより意に満たぬ點が多々あつた。それで、之を是非理想に近いものに作り替へたいといふ希望を有ち、直にその編修に着手したが、諸種の事情で中止を餘儀なくされ、その後大正十

二年頃、再び繼續して稿を起したが、公務多忙の爲め、復た又中止し、越えて昭和二年になつて三たびペンをこり、寸暇を偷んでは稿を續け、同年八月漸く完成を見たのである。

◇完成したものを仔細に査閲して見るに、當初描いた理想には、まだ相當距離はあるが、然し亦、内心稍や自負し得る様な點がないでもないので、今回思切つて發刊する運びに致したわけである。

◇本書は之を語法・會話・附録の三編に大別してあるが、少年の時期と異なり、成年してから語學を修めるには、語法を學びつゝ之に入るのが最も有效であることは、前記數年間の講習會に於て私の實地に經驗した所である。

◇また、言語を學ぶことにより、その國の風習に自ら通じ得ることいふ反面に於て、言語を學ぶには、先づその國の人情風習を理解せねばならぬ。私は申したい。それで本書會話編には、出来るだけ、朝鮮の人情や、風習や、迷信等を併せ會得し得る様に意を用ひたのみならず、別に附録として『朝鮮の風習』を加へることとした。之は朝鮮總督府の調査に係り、パンフレットとして曾て發行されたもので、如何にも簡明にして要を得て居るが、當局の好意に依り、茲に附録として添ふるを得たことは、私の深く感謝し、欣幸とする所である。

◇本書の爲め、山梨總督閣下から特に題字を賜はり、李學務局長閣下、恩師金澤博士及び先輩たる

上梓に當つて

四

藤波・田中兩通譯官から、それぞれ序文を寄せられたことは、著者の深く感銘し、衷心感謝に堪えぬ所である。

◇なほ本書の編纂につき、多大の助力を與へられた慶尙北道視學金秉旭君に對し、この機會に於て深く敬意を表する。

昭和三年 櫻花爛漫の頃

著者

瓠公者、未詳其族姓、本倭人、初以瓠
繫腰、渡海而來、故稱瓠公。

(三國史記)

會話法 朝鮮語大成 目次

第一編 語法

第一章 諺文……………一

第一節 序說……………一

第二節 母字と子字……………二

第三節 激音と濃音……………四

第四節 緩字法及び發音……………六

第二章 名詞……………一五

第一節 本來の名詞……………一五

第二節 用言より出でたる名詞……………一六

第三節 外來の名詞……………一八

第三章 代名詞……………二〇

第一節 人代名詞……………二〇

第二節 指示代名詞……………二四

第三節 疑問代名詞……………二九

第四章 天爾乎波……………四

第一節 は・がを・でに……………四

第二節 『が』・『を』・『で』の變用……………五

第五章 動詞・形容詞……………四二

第一節 活用及び時……………四二

第二節 動詞と形容詞との中間に在る詞……………五二

第三節 連用法・連體法……………五三

第四節 推量法……………五八

第五節 否定及び禁止法……………六〇

第六節 命令法……………六三

第七節 疑問法……………六四

第八節 尊敬法……………六八

第六章 接續詞……………七四

第七章 副詞・感動詞……………七九

第一節 副詞……………七九

第二節 感動詞……………八三

第八章 助辭……………八四

第九章 數詞……………九

第一節 數の稱呼……………九

第二節 曆日……………一〇三

第三節 助數詞……………一〇七

第十章 接頭語と接尾語……………一〇九

第十一章 高字と音便……………一一三

第一節 高字……………一一三

第二節 音便……………一一五

第二編 會話

第一節 交際……………一二九

第二節 官廳・事務……………一三八

第三節 教育……………一四八

第四節 人事……………一五五

第五節 冠婚・喪祭……………一六〇

第六節 衣服……………一六五

第七節 飲食……………一七八

第八節 家屋・家具……………一九三

第九節 時日・時期……………二〇六

第十節	身體・動作	二六
第十一節	旅行	三七
第十二節	散步・遠足	三七
第十三節	天文・地理	四八
第十四節	動物	六一
第十五節	植物	七三
第十六節	樹木	七七
第十七節	農事	八三
第十八節	商業	八八
第十九節	數量・度量衡	九四
第二十節	擬聲語	一〇〇
第二十一節	擬容語	一〇七
第二十二節	俚諺	一三六
第二十三節	字劃	一三九

附錄

一、朝鮮語用字比較例

一、人	事	一
二、性	行	一

三、身	體	三
四、衣	食	四
五、建	築	五
六、器	具	五
七、慶	弔	七
八、交	際	七
九、職	業	八
〇、經	濟	九
一、天	文・地	〇
二、文	理	〇
三、文	書	一
三、時		二
四、雜		三
二、千	字	二五
三、朝鮮	の風習	二七
一、社	會階級	二九
二、一	家の意味	三〇
三、家	庭	三三
四、男	女の別	三四
五、言	語と應對	三五
六、訪	問と接客	三七

目次

七、服	裝	三九
八、飲	食	四一
九、住	居	四三
一〇、年中行事	事	四四
二、補	遺	五三

本朝世宗二〇〇八年御製訓民正音、上以爲諸國各製文字、以記其國之方言、獨我國無之、遂製子母二〇〇十八字、名曰諺文、開局禁中、命鄭麟趾申叔舟成三〇〇問崔恒等撰定之、云々。(東國文獻備考)

會話語法 朝鮮語大成

奥山仙三著

第一編 語法

第一章 諺文

第一節 序 說

日本内地で、漢字と假名とが併用されて居る様に、朝鮮にも漢字と假名の兩方が使用される。漢字は彼我全然共通であるが、朝鮮の假名は諺文又は反切字と稱して、内地の假名とは全く趣を異にして居る。内地の假名は、形象文字たる漢字の劃を崩したもの、若くはその一部分であるから、其の成立の系統から謂へば表音文字ではない。然し、諺文は漢字とは何等の緣故をもたぬ純粹の表音文字であつて、其の構成頗る進歩的、合理的、科學的であり、而かも文字の形態甚だ簡單で、基礎となるべき字數は僅に二十五字に過ぎぬ。數百年の昔、よくも斯の如き立派な文字が發明されたものご驚歎せざるを得ない。この諺文こそは、實に朝鮮の有史以來、最も世界に誇るに足るべき、文

トトは開口音（オ）を稱し、大きく口を開いて發音する。トヨは咽喉音（ウ）を稱し、口を開いた儘咽喉を動かして音を出す。ユユは舌音（リ）を稱し、口を圓くすぼめ、舌を下方に引付けて發音する。トトは唇音（フ）を稱し、唇をト殊（ト）に下唇を前方に突出して發音する。一、は牙音（ハ）を稱し、一は口を左右に開き、上下の齒を殆ど接觸するまでにして置いて、『ウ』を發音する積りにして出せば、euの音が出る。一は『イ』と同じく、は現在に於てはトト同音であるが、昔は『ア』に近い特殊の音を表はしたものと思はれる。

朝鮮語の發音は頗る困難である、到底筆を以て説明することは不可能であるから、實地に朝鮮人に就いて學ぶより外はない。殊にトヨユユ、トト一の如きは、内地人にまつては極めて區別しにくい音で、この區別が不完全な爲め、飛んでもない間違を起すことが往々ある。この區別を次節に述ぶる激音及濃音の發音が完全に出來れば、朝鮮語の發音は大體に於て及第を謂つて宜しい。外國語を學ぶに、發音を輕視する人がよくあるが、之は飛んでもない不心得なことで、發音を正確にするにふこころは、外國語を學び、之に上達する要諦の第一である。

次に十四個の子字中先づ十個だけを左に示す。

子字 讀方(名稱)

相當する羅馬字

ㄱ Kiok 或は Kiuk

k

ㄴ Niun

n

ㄷ Tik

t

ㄷ	riol 或は riul	r · l
ㄹ	miom 或は mium	m
ㅂ	piop 或は piup	p
ㅅ	siof	s · t
ㅇ	ing 或は haing	ng
ㅎ	(讀方なし)	h
ㅍ	(讀方なし)	ch
ㅑ	(讀方なし)	

第三節 激音と濃音

前節に述べた子字十個の外、猶左の如き四個の子字がある。之を激音又は氣音と稱し、別に讀方はない。

ㅈ	ㅊ	ㅌ	ㅋ
ch'	p'	t'	k'

ㅈㅊ大はㄱㅌスに一點を加へたもの、ㅌㅊはㅈの變形である。その發音は、ㄱㅌスの音を出すと同時に、肺臓内にある空氣を、一時に強く排出するのであるが、内地人には餘程困難な音であるか

*
日ハ口の變形
なり故に兩者
の音相通ず

ら、十分練習を積まねばならぬ。

激音と同様、發音の困難なものに、濃音といふのがある。これは「ロロ人」の音が非常に詰つて、固く發音される場合の音を謂ふのであつて、左肩に人を附して之を表はす。時には、㇗㇗㇗㇗㇗の如く、同字を二つ並べて之を表はすこともあるが、普通は人の添加に依つて之を表はす。この人のこごを𐄂人 (toin-siof) と稱するが、𐄂は『濃き』の意味だから、𐄂人と謂へば、取りも直さず『濃い音を表はすに用ふる人』といふ意味で、その意味からして、著者は𐄂人の附いた音を濃音と名付けたのである。

㇗	㇗	㇗	㇗	㇗
kk	tt	pp	ss	cch

濃音は、ラッパ (rappa)、ハッカ (haka)、コップ (koppu) 等の場合に於ける『ッパ (ppa)』『ッカ (kka)』『ップ (ppu)』の音が即ちそれで、換言せば促音と謂ふこごが出来る。但し國語では促音は語頭に來るこごはないが、濃音は語頭にある促音なのだ。促音であるが故に、羅馬字では促音合と同様に、同文字を二つ重ねて㇗㇗㇗㇗の如くして表はすこごのあるのは、寧ろ却て合理的だとも謂へる。茲に注意すべきは、濃音を濁音と同様に考へ、全然濁音の如く發音する人が往々ある

が是は誤りである。朝鮮語にも、濁音は音便に依つて澤山生ずるが、濃音と濁音とは根本的に異なる音で、濁音は感じが柔かだが、濃音は反對に非常に硬い感じを與へる。故に濃音は亦『硬音』と謂つても宜からうと思ふ。而して濃音になり得るものは、ㄱ、ㄷ、ㄱ、ㄷ、ㄴ、スの五字に限るのである。

第四節 綴字法及び發音

子字と母字と組合はさる場合は色々あるが、實地に必要なのは左の六種類である。

一、子字一個と母字一個

これは、子字及び母字の全部に就いて、表として左に示して置く。

			子字	母字
ㄷ t	ㄴ n	ㄱ k		
ㄷ ta	ㄴ na	ㄱ ka	ㅏ a	
ㄷ tya	ㄴ nya	ㄱ kya	ㅑ ya	
ㄷ tö	ㄴ nö	ㄱ kö	ㅓ ö	
ㄷ työ	ㄴ nyö	ㄱ kyö	ㅕ yö	
ㄷ to	ㄴ no	ㄱ ko	ㅗ o	
ㄷ tyo	ㄴ nyo	ㄱ kyo	ㅛ yo	
ㄷ tu	ㄴ nu	ㄱ ku	ㅜ u	
ㄷ tyu	ㄴ nyu	ㄱ kyu	ㅠ yu	
ㄷ teu	ㄴ neu	ㄱ keu	ㅡ eu	
ㄷ ti	ㄴ ni	ㄱ ki	ㅣ i	
ㄷ ta	ㄴ na	ㅁ ka	ㅏ a	

第一章

ㄷ t' ㅋ k' ㅈ ch ㅎ h ㅇ ㅅ s ㅍ p ㅁ m ㄹ r

諺 ㄷ t'a ㅋ k'a ㅈ cha ㅎ ha ㅏ a ㅅ sa ㅍ pa ㅁ ma ㄹ ra

文 ㅌ t'ya ㅋ k'ya ㅉ chya ㅎ hya ㅑ ya ㅆ sya ㅑ pya ㅑ mya ㄹ rya

ㄷ t'ö ㅋ k'ö ㅉ chö ㅎ hö ㅓ ö ㅆ sö ㅍ pö ㅁ mö ㄹ rö

ㅌ t'yö ㅋ k'yö ㅉ chyö ㅎ hyö ㅕ yö ㅆ syö ㅑ pyö ㅑ myö ㄹ ryö

ㅌ t'o ㅋ k'o ㅉ cho ㅎ ho ㅜ o ㅆ so ㅍ po ㅁ mo ㄹ ro

ㅌ t'yo ㅋ k'yo ㅉ chyö ㅎ hyo ㅠ yo ㅆ syo ㅑ pyo ㅑ myo ㄹ ryo

ㅌ t'u ㅋ k'u ㅉ chu ㅎ hu ㅜ u ㅆ su ㅍ pu ㅁ mu ㄹ ru

ㅌ t'yu ㅋ k'yu ㅉ chyü ㅎ hyu ㅠ yu ㅆ syu ㅑ pyu ㅑ myu ㄹ ryu

ㄷ t'eu ㅋ k'eu ㅉ cheu ㅎ heu ㅡ eu ㅆ seü ㅍ peü ㅁ meü ㄹ reü

七

ㄷ t'i ㅋ k'i ㅉ chi ㅎ hi ㅑ i ㅆ si ㅑ pi ㅑ mi ㄹ ri

ㅌ t'a ㅋ k'a ㅉ cha ㅎ ha ㅏ a ㅆ sa ㅑ pa ㅑ ma ㄹ ra

ㅈ ch'	ㅊ p'
차 ch'a	ㅈㅊ p'a
차 ch'ya	ㅈㅊ p'ya
차 ch'ö	ㅈㅊ p'ö
차 ch'yö	ㅈㅊ p'yö
초 ch'o	ㅈㅊ p'o
초 ch'yo	ㅈㅊ p'yo
추 ch'u	ㅈㅊ p'u
추 ch'yu	ㅈㅊ p'yu
ㅈ ch'eu	ㅈ p'eu
차 ch'i	ㅈㅊ p'i
ㅈ ch'a	ㅈㅊ p'a

右表中最上段トの母字を伴ふ綴字こ、最下段、の母字を伴ふ綴字こ發音の同一なることは、既に第二節に述べた。尙左に拔萃した綴字は、現今實際に於ては、各同音に發音されるのである。

1. ㅈㅊ 차 何れも cha こ發音される
2. ㅈㅊ 차 何れも chö こ發音される
3. ㅈㅊ 초 何れも cho こ發音される
4. ㅈㅊ 추 何れも chu こ發音される
5. ㅈㅊ 차 何れも chi こ發音される
6. ㅈㅊ 차 何れも sa こ發音される
7. ㅈㅊ 차 何れも sö こ發音される
8. ㅈㅊ 초 何れも so こ發音される
9. ㅈㅊ 수 何れも su こ發音される
10. ㅈㅊ 차 何れも ch'a こ發音される

第六項参照

- | | | | | |
|-----|-----|-----|------|--------|
| 11. | 더치치 | 何れも | ch'ö | こ發音される |
| 12. | 도초초 | 何れも | ch'o | こ發音される |
| 13. | 류추추 | 何れも | ch'u | こ發音される |
| 14. | 리치 | 何れも | ch'i | こ發音される |

人は第二節に説明した如く、s及びtの音を表はすに用ひられ、初聲^{*}の場合はs、終聲^{*}の場合はtの音になるのである。

○も第二節に説明した如く、ngの音を表はすのであるが、それは終聲^{*}に用ひられた場合であつて、初聲^{*}即ち右表の如く아야等に用ひられた場合は無音となる、随つて、아야は母字のみのトトの發音と同じなのである。

二、子字一個と母字二個

一個の子字に二個の母字の連結する例は、凡そ左の九種の場合である。

1. トミー (或は、ミー)

개 새 비 히

2. トミ

애

3. トミ

네 데 케 처

4. 키미

계 테 처

5. 키미

괴 쇠 퇴 퇴

6. 키미

귀 뒤 쥐 취

7. 키미

괴 닌 식 희

8. 키미

과 와 좌 화

9. 키미

귀 위

三、子字一個と母字三個

母字三個が重なる場合は『키미』及び『키미』の二種類である。

과 와

귀 위 취

四、子字二個と母字一個

각 난 달 숨 입 팻 종

五、子字二個と母字二個

これは、第二項に掲げたものに、更に子字一個が語尾として加はつた場合である。

개 민 활 성 횡

六、子字三個と母字一個

닭

ㅅ
ㅅ

以上第一項乃至第六項に擧げた例に就いて見ればわかる様に、諺文の綴り方は、母字は、其の軸の縦なるト、ト、イ、キ、一の五字は子字の右側に付き、ム、ム、下、兀、一の如く軸の横なるもの、及び、は、子音の下に附くを法則とする。又綴字は、常に子字を以て始り、左の如く常に左から右へ、上から下へこいふ順序になるのである。

가→

고↓

간→↓

갈→↓

凡て綴字の初頭に來る子字を初聲、之に附隨する母字を中聲、語尾に來る子字を終聲と稱へる。尙ほ第二項及び第三項の例の如く、母字二個又は三個重つて附隨するものを重中聲と謂ひ、第六項の例計、ㅅ、ㅅの如く、子字二個が終聲となるものを重終聲と稱へる。而して終聲となる子字は以上例示した通り、フ、シ、ロ、ヨ、口、日、人、の七字に限るのである。

諺文は、斯くの如く、組織的な表音文字であつて、母字と子字とが組合つて種々の音を表はすこと、羅馬字の綴字に於けること此の差異がない。故に諺文の發音は、本節第一項の表に照らし合はし、羅馬字に綴り變へて見るに容易にわかるのである。

가 k-a...ka
 달 t-a-r...tar
 식 s-a-i-k...saik
 삼 s-a-r-m...sarim
 팻 p'a-t...p'at
 설 pp-u-r...ppur

激音と濃音は、前に謂つた通り、頗る發音が困難で、往々未熟な中は兩者を混同したり、又普通の清音と混同したりするが、この三種の發音は、夫れ々異なるのみならず、例へば假名で表はせば單に『プル』や『チャ』や『タ』でも、左の通り意義が異なるのである。

普通音	불	pur	火	달	tar	月
激音	풀	p'ur	草	탈	t'ar	假面 <small>めん</small>
濃音	설	ppur	角	탈	ttar	娘
普通音	자오	cha-o	寢る	다오	ta-o	甘い <small>あま</small>
激音	차오	ch'a-o	冷い	타오	t'a-o	乗る
濃音	외오	ch'a-o	鹹い	타오	tt'a-o	挽 <small>も</small> ぐ

と同じく、釜は쓰고同じく、斧は손고同じである。

これを以て、諺文の綴字法及び發音の説明は、その大要を終つたのである。尙以上各節に述ぶる所は、初學者に對しては、頗る無味乾燥の様であるが、これが即ち朝鮮語學習の根本基礎となるのであるから、反覆練習、よくよく是に習熟せねば駄目である。

第二章 名詞

第一節 本來の名詞

此處で本來の名詞を謂ふのは、以下第二節及び第三節に謂ふ所の、用言即ち動詞・形容詞等から出た名詞、及び外來の名詞に對して謂つたので、換言せば、朝鮮語に於ける純粹の名詞といふ意味である。

개	말	소	집	머리	팔
犬	馬	牛	家	頭	腕

本章以下文字の左側に附したる：に就ては第十一章第一節を見よ

개구리 蛙

:사람 人

외치 かさぎ

쌀 米

第二節 用言より出でたる名詞

國語に於て、左の如く、『あゆーむ(歩)』『いふ動詞から』『あゆーみ』『いふ名詞が生れ、『たかーし(高)』『いふ形容詞から』『たかーさ』『いふ名詞が作らるゝが如く、朝鮮語にも同様の法式に依つて、用言ー即ち動詞や形容詞から名詞に變る例が澤山ある。

用言	名詞
ayum-u	歩む……………ayum-i 歩み
ikar-u	怒る……………ikar-i 怒り
hanas-u	話す……………hanas-i 話し
takas-i	高し……………takas-a 高さ
hukas-i	深し……………hukas-a 深さ
akas-i	赤し……………aka-mi 赤み
omos-i	重し……………omo-mi 重み

一、語根に口を附するもの

자	(眠る)……………잠	(睡眠)
지	(負ふ)……………짐	(荷物)
추	(踊る)……………춤	(踊り)
니르	(稱ふ)……………니름	(名稱)
:그리	(描く)……………그림	(繪畫)
다르	(違ふ)……………다름	(相違)
:치	(數ふ)……………셈	(勘定)
차호	(爭ふ)……………차흥	(爭鬪)
수	(息 ^{いき} する)……………숨	(呼吸)
무	(夢みる)……………꿈	(夢)

二、語根に기를附するもの

:살	(活きる)……………살기	(生活)
보	(見る)……………보기	(見かけ、外貌)
하	(爲 ^す る)……………하기	(爲 ^す ること)
크	(大きい)……………크기	(大きさ)
:길	(長い)……………길기	(長さ)

높 (高い) …… 높기 (高さ)

:깊 (深い) …… :깊기 (深さ)

三、語根に이, 키, 이等を附するもの

넓 (廣い) …… 넓이 (廣さ、幅)

:길 (長い) …… :길이 (長さ、縦)

지 (擔ふ) …… 지기 (擔機)

베 (枕する) …… 베기 (枕)

막 (塞ぐ) …… 막의 (栓)

第三節 外來の名詞

國語には、外國から輸入された名詞が澤山ある。それが外國語其の儘で使用されて居るものこ、多少訛つて使用されて居るものこの二種類がある。マツチ、ナイフ、ランプ、テーブル等の如きは其の前者に屬するもので、ハンケチ、ボタン、ペンキ、ビフテキの如きは其の後者に屬するものである。

朝鮮にも、これと同じく、外國から這入つたものこ、國語から來たものこの二種がある、然し前

者も、實は直接外國から這入つたのではなく、前記のナイフ、ランプの類の如く、一旦内地へ輸入され、國語として使用されたものが、更にその儘朝鮮に這入つたものである。

란 푸	ランプ
스타이크	スタイル
하이카라	ハイカラ
테니스	テニス
인크	インク
구투마	車
구두	洋靴
야지	彌次
노리가에	乗換へ
다다미	畳

その他數へ來れば無數にある。それから、内地に於ける漢字の熟語が其の儘盛に使用される、漢字は内鮮共通ではあるが、實際に於ては、其の取扱方や意味のこり方に於て兩者間著しき差異がある。其の如何に差異の甚しきかは、附録『朝鮮語國語用字比較例』にその一部を例示して置いたから、それを見るならば、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。であるから、如何に漢字が共通であるからこいつて、内地の漢字熟語が其の儘朝鮮人に直に解かるこいふ譯にはいかぬ、然しこ

の頃では、新教育を受けた青年や有識階級には、内地の漢字熟語の大部分がその儘同じ意味で喜んで使用される様になつて居る。従つて、新聞雜誌其の他文書類にも、此等の熟語が、自由に用ひられて居るのである。例へば、取引、届出、手續、引繼、取締、取扱、取調、銀行、理髮の如きは、漢字を一字々々引離しては無論意味が共通だが、さて斯様に熟語になつては、従來は全然朝鮮語としては通用しなかつたのであるが、元來之に相當する朝鮮語としての熟語がなかつた故せいもあらうが、現代に於ては、全く共通の意義を以つて使用される様になつたのである。

第三章 代名詞

第一節 人代名詞

一、一人稱 を表はす代名詞は나である。

나는성도요

私は生徒です

나는안가요

私は往きません

나도보았소

私も見ました

나를대리고가시오

私を連れしお出でなさい

『私が』のがに相當するがで受ける場合、『私に』のにに相當する게で受ける場合には、나가나に變化する。

내가주인이요

私が主人です

내가 먹었소

私が食べました

내게 말하시요

私にお話しなさい

내게 뵈시오

私にお見せなさい

나의 複數は 우리 である。

우리는、조선 사람이요

我々は朝鮮人です

우리가、다、가겠소

我々が皆参りますう

우리들、조롱하였소

我々を嘲弄しました

우리도、보았소

我々も見ました

내及び 우리는 亦『私の』『我々の』の加く所有格にも用ひられる。

내척이요

私の本です

내얼굴보오

私の顔を御覽なさい

내말드르시오

私の言ふことをお聞きなさい

우리나라 사람이요

我國の人です

우리집이다

我々の家だ

自分のことを指して 이 사람 (この人)、본인 (本人) なら、謂ふことがある。又卑下して 저、저、소인 (小人) なら、謂ふこともある。저는『あれ』、저는『저이』即ち『あの者』の意味であつて、元來は三人稱であるが、謙遜の意味を表はす爲に、直接自分を指すことを避け、三人稱を以て一人稱

に代用したのである。國語でも、自分を卑下して『手前』とか『某』それがしとか謂つたり、或は相手の人間を尊敬して『貴方』あなた即ち『彼方』あなたといふ三人稱を用ひたりするのと同様のやり方である。

죄는, 담비를, 못먹습니다

手前は煙草をいたゞきません

죄는, 장사합니다

手前は商賣を致して居ります

죄가, 댜시고, 가겟소이다

手前がお供して参りませう

죄는, 아모기를시다

手前は某で御座います

:소인은, 모르겟습니다

手前は存じません

죄는亦所有格にも用ひられる。

죄것이올시다

手前のもので御座います

죄아비를시다

手前の親父おやぢで御座います

『自分』又は『己れ』に當る語は:자갸,* :자긔,* :당신*である。

자갸가, 혼일이요

自分のした事です

:자긔만먹는다

自分許り食つて居る

당신은가지도안코

自分は往きもせず

二、二人稱 『汝』を表はす代名詞は너, 네であるが、네は前項一人稱의나と同じく『汝가』の様に、『가』の助辭を受ける場合及び所有格の『汝의』の場合にのみ用ゐる。

너는몇살이나

お前は幾歳か

*自己、*當身

너도왔느냐

お前も来たのか

네가했었느냐

貴様がしたのか

네가갈터이냐

貴様が往く積りか

네것이다

お前の(もの)だ

네이름이무에냐

お前の名前は何かいふか

此の複數を表はす特殊の形はない、너に助辭を補つて『너의들』として之を表はす。의は所有格を表はす助辭で、들은複數を表はす助辭である。

너의들도、먹어라

お前達も食へ

너의들은、가만히잇거라

貴様達はじつこして居れ

相手に對し、極く親密の意味を含めた稱呼に자네がある、之は國語の『君』位に相當する場合に用ひられる。

자네도오기

君も來給へ

자네집이어테인가

君の家は何處だい

자네아들인가

君の子息かね

*당신は亦『貴方』の意にも用ゐられる。형(兄)、노형(老兄)、집(宅)、공(公)等も『貴方』を譯するより外はないが、何れも당신よりは稍や尊敬の度が落ちる、自分と同等位の程度の人に向つて用ふべきである。공は餘り用ひられぬが、朝鮮人が他國人に對してのみ用ゐる稱呼である。尙

영감 (令監) は長者に對して用ひ、대감 (大監) は勅任官以上若くは嘗て勅任官以上の役に在つた人に用ひる敬稱である。此の頃は内地流に각하 (閣下) なぎも盛に用ゐられる。

三、三人稱 朝鮮語には、國語の『彼』^{かれ}の如く、三人稱を表はす代名詞が無いので、他の語に指示代名詞たる이 (此の)、그 (其の)、저 (彼の) を冠して之を表はすのである。

이놈을, 저러라

此奴を擲れ

그사람의척이요

其の人の本です

저냥반은, 누구시요

彼の方は何方ですか

『某』に相當する語は、아모 (又は아무) である。之に稍や親密の意を含めて、아모기를謂ふこともある。아모は亦『或る』『何人』^{なんひと}『如何なる』の意味に用ゐられることもある。

아모라는사람이요

某といふ者です

아모기가, 여스여스말을엿소

某が斯く斯くご申しました

아무날, 아무데서, 죽었소

某日某所で死にました

아무라도관계치안소

何人(誰)でも構ひません

아모써라도, 그러케, 하지요

如何なる時(何時)でもさう致します

第二節 指示代名詞

一、この、その、あの を表はす指示代名詞は左の通りである。

二項及三項の
例は元來副詞
なれども指示
代名詞より出
でたる副詞な
るを以て便宜
此處に擧げた
り

이 この

그 その

저 あの

이 사람이요

この人です

그말을, 들었소

その話を聞きましたか

저것을보시오

あの鳥を御覽なさい

これ、それ、あれといふ場合には、이、그、저に것(もの)を附して云ふのである。

이것보시오

これを御覽なさい

이것이, 무엇이요

これは何ですか

그것을, 집어주시오

それを取つて下さい

그것보다, 낫소

それよりか好いです

저것은, 호랑이요

あれは虎です

저것보아라

あれを見ろ

二、 こちらへ、そちらへ、あちらへ

이리오시오

こちらへ御出でなさい

이리안즈시오

こちらへ御坐りなさい

그리가시오

そちらへ御出でなさい

그리갑시다

そちらへ参りませう

키리날아가소

あちらへ飛んで往きました

키리홀너가오

あちらへ流れて往きます

三、かう、さう、あ、

이러케하시요

かうしなさい

이러케되었소

こんなになりました

그리케큰가

そんなに大きいのか

그리케웃지마시요

さう笑つちやいけません

키리케하는것이요

あ、するのです

키리케완고흐사람은업소

あんなに頑固な人はありません

前節の이리、그리、키리는往々이러케、그리케、키리케と同様の意義に用ひられることがある。

四、こんな、そんな、あんな

이런것이、잇습닛가

こんなのが有りますか

그린말은、못들었소

そんな話は聞いたことがありません

키린사람은、키음보앗소

あんな人は始めて見ました

五、場所の指示代名詞 此處、其處、彼處の如く場所・位置を表はす代名詞は여기、거기、키기で

ある。

이러케하시요
이러케되었소
그리케큰가
그리케웃지마시요
키리케하는것이요
키리케완고흐사람은업소

이런、그리、
저런、이러한
한音、저러한
て元來一種の
修飾語なるも
이、指示代名詞
より出でたる
ものなれば、
宜本節に掲ぐ
ることゝせり

山* 所*
産

여귀가, 총독부요

此處が總督府です

여귀가, 어되요

此處は何處ですか

거귀처, 날마다, 덩기나

其處から毎日通ふのか

거귀보다, 똥똥합디다

其處よりか暖い様です

귀귀요

彼處です

귀귀처, 소리가나오

彼處で音がして居ます

여귀, 거귀, 귀귀は亦『此處の』『此處に』、『其處の』『其處に』、『彼處の』『彼處に』の意味にも用ひられる。

여귀사람이요

此處の人間です

여귀, 벼루가, 잇소

此處に硯があります

거귀소산이랍디다

其處の産物だそうです

거귀, 갓다왓소

其處へ往つて來ました

귀귀산이, 남산이요

彼處の山が南山です

귀귀, 뵈는것이, 무엇이요

彼處に見えるのは何ですか

『此處』を예, 『其處』及び『彼處』を계미いふこゝもある。

예서, 멧나나되오

此處から何里位ありますか

예가, 경찰처요

此處が警察署です

제가사, 잘, 놀고왔소

彼處へ往つて愉快に遊んで來ました

계서, 다달이, 한번씩, 댜오

其處で毎月一度づゝ集會します

上記の이, 그, 자及び여기, 거기, 자기의여, 거, 자の代りに、요, 고, 조といふことがある。之は、指示の範圍を前者よりも一層縮少して指すことになる。換言すれば一段々明確に且つ強い意味を帶ぶることになるのである。

○指示代名詞表

其の 一

此	이	この	이것	これ	이리	こちらへ	이러케	こう	이런	こんな	여기	此處
其	그	その	그것	それ	그리	そちらへ	그러케	そう	그런	そんな	거기	其處
彼	자	あの	자것	あれ	자리	あちらへ	자러케	あゝ	자런	あんな	자기	彼處

其の 二

此	요	この	요것	これ	요리	こちらへ	요러케	こう	요런	こんな	요기	此處
其	고	その	고것	それ	고리	そちらへ	고러케	そう	고런	そんな	고기	其處
彼	조	あの	조것	あれ	조리	あちらへ	조러케	あゝ	조런	あんな	조기	彼處

이리, 이리케, 이런, 이러케, 이에는非るも、詞には非るも、二七頁の欄外註と同様の意外味に於て本表に揭げたり

第三節 疑問代名詞

一、『何』は無엇、『何の』は無스である。

무엇이 오닛가

何で御座いますか

무엇무엇이요

何々ですか

무엇하러가오

何しに往まますか

무엇이잇소

何がありませんか

무스칙이요

何の本ですか

무스명이요

何病氣ですか

무스나 무요

何の樹ですか

右に擧げた例は、質問の『何』であるが、質問の意を含めず、單に疑問として、例へば『何か』(し)はいつて居るらしい』とか『何か(何ぞ)持つて來たのか』といふ様な場合は、矢張무엇で表はす。

무엇이, 들었나보다

何か入つて居るらしい

무엇, 가키왔나

何か持つて來たのか

この『무엇, 가키왔나』は、『何を持つて來たか』といふ純然たる質問にもなる、換言せば、單に書いてある文字を見たゞけでは、質問か單に疑問か區別が付かぬこゝもあるから、發音の口調アクセントに依つ

て其の何れなるかを察せねばならぬ。簡單にいへば、疑問代名詞があつて、それが質問の場合ならば、大抵語尾のアクセントが下がり、單純な疑問の場合は、語尾が上がるのである。之に就いては猶第五章の第七節を参照せられ度い。

疑問代名詞が、上記の如く二様に使はれるのは、單に『무엇』の場合のみでなく、以下數節に説く所の^{*}『누구(誰)、어디(何處)、언제(何時)』等の場合に於いても然りである。國語に未熟な朝鮮人がよく『무엇이 들었나 보다』を『何が入つて居るらしい』と謂つたり、『무엇이 나왔나』を『何持つて來たのか』と誤つて謂つたりするのは、全くこれに基因するのである。

二、『何處』は 어디である。어디は亦助辭を附せずして『何處に(—へ)』又は『何處の』の意味にもなる。

어디요

何處ですか

어디어디요

何處々々ですか

어디쯤이요

何處ら邊ですか

어디인지, 모르겠소

何處だか分りません

어디잇습닛가

何處に御座いますか

어디가시요

何處へお出で、すか

어디소산이요

何處の産物ですか

어디서, 사왔나

何處で買つて來たのか

所*
産

*二節三節四節
參照

模* 出*
様 入

賞*
賞は小刀、刀、
其の他凡て刃
物を謂ふ

어디는、亦左の如き意味に於ても用ひられる。

어디, 좀, 놀다가자

何處かへ一つ遊びに往かう

어디, 출입을힛습니다

何處かへ外出致しました

어디가, 알흔모양이요

何處か痛むらしいです

三、『誰』は누구又は누である。但し누は『誰が』の場合即ち가의助辭を受ける場合にのみ用ひられる。猶ほ누고이ふのがあるが、之は『誰の』の如く所有格を表はす時に限り用ひられる。

누구나

誰か

누구시요

誰人ですか

누구를, 차즈시요

誰をお探しですか

상한사람이, 누구누구요

賞與を貰つた人は誰々ですか

이것이, 낫칼이요

これは誰の小刀ですか

누것인가, 물어보아

誰の(もの)か聞いて御覽

누구及び누는、亦左の如き意味に於ても用ひられる。

누구를, 하나, 불러오나라

誰か一人呼んで來い

누가, 들어왔구나

誰か這入て來たな

四、『何時』及び『何時の』は언제で表はす。

언제, 떠나십닛가

何時御出發ですか

卒* 片*
業 紙

附* 番*
託

祭* 便* 車*
祀

:언케옵, 가릿가

何時頃參上しませうか

:이편지가, 언케온것이요

此手紙は何時來たのですか

:언케졸업이요

何時の卒業ですか

그것은, 언케말이요

それは何時の話ですか

언케は、亦左の如き意に於ても用ひられる。

:언케, 한번, 놀너오시요

何時か一度遊びにお出なさい

:언케, 부락한일은, 엇지되었나요

何時か頼んだ事は如何なつたんですか

五、『ごの』は어는又は어니である。『これ』こいふ場合は、之に것(もの)を附して、어는것、어니것こいふ。

어는길이요

ごの道ですか

어는차가, 쇠을차요

ごの列車が京城行ですか

어는것을, 조와하시요

これが好きですか

어니편에잇는가

ごちら側かたに居るのか

어니날에, 제스지낼터이요

ごの日(何日)に祭り(先祖の)をする豫定ですか

六、『何故』は왜である。

왜 요

何故ですか

왜, 그러십닛가

何故さう爲さるんですか

緣故、地境*

웨、안먹어

何故食はんのか

웨は웨ニなつて『何ニしたる』の意味を帶ぶる修飾語ニなことがある。

웨외답인지、알수업소

どうした譯か分りません

웨안고로、이지경이된것이요

どうした因縁で斯様な仕末になつたんですか

엇지、엇지치なきも『何故』の意味になる。엇지は元來엇지치의約で、엇지は『如何にして』の意味の副詞、치여は動詞치(爲す)の中止形であつて、何れも決して代名詞ではないが、意味から

考へて便宜本節に擧げるのである。

엇지、안가시오

何故お出になりませんか

엇지치、이러케、느긋소

どうしてこんなに遅れたのですか

七、『如何なる』『どんな』は、形容詞엇디다の活用を以て之を表はす。隨て、之は形容詞の項に

於て説くべきであるが、意義から考へて、便宜上本節に示すこととする。

일기가、엇디소

天氣は如何ですか

자미가、엇디시오

御機嫌如何ですか

엇던옷을、넌었소

どんな着物を着て居ますか

모양이、엇디케、되었소

形がどんなですか

엇디케、놀났는지、말도못하었소

そんなに喫驚びっくりしたところか物も云へませんでした

엇던は、亦『或る』の意味にも用ひられる。

模* 様
엇디다디는엇디
하기의音便な
리

日* 氣
滋* 味
第一節を見よ

八、數の疑問代名詞は、몇 (訛りて몇^もも發音す) 及び얼마である。而して、之は『何人』『何個』の如く、接頭語となることもある。

모도, 몇치요

皆で幾つですか

몇개, 남았나, 쇠여보아라

何個残つたか數へて見ろ

나히, 몇살이나

歲が何歲か

몇시가, 되었소

何時なんじになりましたか

수효가, 몇안되오

數が幾らもありますん

몇칠잇다가, 다시왔소

幾日かして又參りました

갑시, 얼마오

値段は幾らですか

*얼마나, 고성을보았는지, 알수가업소

どれ位難儀したか知れませんか

*지산이, 얼마안되오

財産が幾らありません

*얼마전에, 한번왔섯소

いつか一度來ました

第四章 天爾乎波

第一節 は、가、を、で、に

此處では、助辭の中天爾乎波の主要なものゝみを擧げ、其の他種々の助辭は、第八章で説くこと

貫* 兩* 主* 日*
 斑 人 氣

しする。

一、『は』の助辭は、ん又は으である。前者は母字で終る語に連なり、後者は子字で終る語、換言せば終聲ある語に連なる。

나는, 이등이라합니다

私は伊藤と申します

:개는, 집을 지키는, 짐승이요

犬は家を守る動物です

담비는, 못먹소

煙草は呑みません

요시는, 날마다, 비가오오

此頃は毎日雨が降ります

이집은, 세집이요

此の家は貸家です

군청은, 어디냐

郡廳は何處か

일본말은, 모르겟소

日本語は分りません

죄냥반은, 누구시요

あの方は誰方どなたですか

二、『가』には、母字で終る語に附く가、子字で終る語に附く이がある。

내가, 이집주인^{*}이요

私が此の家の主人です

비가, 압흐오

腹が痛みます

일기가, 좃소^{*}

天氣が好いです(好い天氣です)

비가, 오오

雨が降つて居ます

:눈이, 킨엿소

雪が霽れました

바람이 부오

風が吹いて居ます

술이 만히잇소

酒が澤山あります

三、『을』を表はすには、을又は을を用ゐる。을は語尾が母字なる時、을は子字なる時に受ける助辭である。

종의를, 가귀오니라

紙を持つて來い

모스를, 쓰고, 가거라

帽子を冠つて往け

글씨를, 써주시요

字を書いて下さい

이책을, 읽어보아라

この本を讀んで見ろ

키산을, 넘어가오

あの山を越えて往きます

물을, 써오니라

水を掬んで來い

朝鮮語では、よく天爾乎波を省略することがあるが、就中この『을』に相當する을、을を略すことが多い。

四、『筆で書く』『木で造る』などの『で』は、로又は오로で表はす。兩者用法の區別は、矢張り前項の例と同じで、連なる語の語尾に依つて、異なるのである。

나무로, 린드오

木で造ります

기차로, 갈터이요

汽車で往く積りです

종의로, 바르시요

紙でお張りなさい

緋* 緞

第*十一*章*音*便*
の*項*參*照

칼*노*と*書*き*て
알*로*と*發*音*す

册* 床

附* 托

인씨로, 쓰지 말고, 먹으로 쓰시오
수외락으로, 잠수시오

インキで書かずに墨でお書きなさい
匙あかでお喫りなさい

옷을, 비단으로, 지엿소

着物を絹で拵へました

同じ子字でも、**ㄹ**で終る語は**ㅇ**で受けずに、母字で終る場合と同様**ㄹ**で受けるのである。然し普通は習慣上**노**と書く場合が多い、但し發音は、音便の關係で、**로**と同様になる。

칼*노, 쇠*르*오

小刀で刺します

플*노, 붓*칫*소

糊でつけました

五、『**ㄴ**』又は『**ㄹ**』は**에**、**의** **게**、**한테**、**터**로で表はす、**에**は母字で終る語と、子字で終る語とに

論なく兩方に附き、**의** **게**、**한테**、**터**로は人間にのみ用ゐる。

하*나*에, 들*을, 터*항*여*라

一に二を加へよ

머*리*에, 이*고*가*시*요

頭へ載せてお出でなさい

침*상*우*에, 노*앗*소

机の上に置きました

어*느*달*에, 입*학*하*였*소

何月に入學しましたか

이*달*스*무*날*에, 떠*날*터*이*요

今月二十日に出發する積りです

물*에, 담*가, 두*어*라

水に漬けて置け

어*직*게, 시*골*에, 갓*소

昨日田舎へ參りました

키*사*람*의*게, 부*탁*하*였*소

あの人に頼みました

第*四*章 天*爾*乎*波

밖게, 나가보시오

外へ出て御覽なさい

○主なる天爾乎波表

는	은	은	은	는	는	は
가	이	시	치	히	기	が
를	을	을	을	을	을	を
로	으로	으로	으로	으로	으로	で
에	에	에	에	에	에	に
母字にて終る語に附く 子字にて終る語に附く 入字にて終る語の大部分に附く 入字にて終る一部の語に附く 入又は日にて終る一部特殊の語に附く 밖(表、外の意)に附く						用
法						

第二節 『가』、『을』、『で』の變用

一、『가』に當る가、이は、『何々になつた』に用られることがある。換言すれば、朝鮮語では『春になつた』と云はずに、『春がなつた』と云ふのである。

양주군수가 되었소

楊州郡守になりました

어느 사이에, 가을이 되었소

いつの間にやら秋になりました

나무잎히, 다, 누른비치 되었소

樹の葉が皆黄色になりました

時* 銃*	親* 向*	醉* 當*
代	舊	對、爲*

二、『を』に當るを、을は、맞나다(逢ふ)、맞다(當る、遭ふ)、당나다(當る)、타다(乘る)、주다(與ふ)、취하다(醉ふ)、대하다(對する)、위하다(爲にす)、향하다(向ふ)等の動詞に連なる時は、『に』の意味になる。

길에서, 친구를, 만났소

途で友達に逢ひました

비를마켜서, 옷시, 켜کت소

雨に遭つて着物が濡れました

*총을, 마쳐, 죽었소

鐵砲に當つて死にました

지금시대를, 당히쳐

今の時代に當つて

비를, 라오

船に乗ります

이문제를, 디히쳐는

この問題に對しては

나를, 주시요

私に下さい(與へなさい)

술을, 몹시취하였소

酒にひびく酔ひました

국가를, 위히쳐, 할일이요

國家の爲にした事です

동녁을, 향하야, 쫓소

東方に向つて立つて居ます

나를(私に)을略して、往々날(何)이ふ(何)がある。之と同様に、나는(私は)을난, 어디를(何處)에어디를, 무엇을(何を)무엇, 이것을(之を)을이걸(何)을이걸(何)을云ふ、左に二三の例を示さう。

날, 주시요

私に下さい

난, 싫어요

私は嫌ですよ

무얼, 보시요

何を見てお出ですか

어딜, 갔다왔소

何處に往つて來ましたか

이걸, 지고, 가거라

是を背負つて往け

를, 을, 亦方向を表はすに用ゐるころがある。

동경을, 갔소

東京へ行きました

어디를, 갔다왔소

何處へ往つて來ましたか

三、『で』に當るる、으로亦方向を表はすに用ゐらるゝころがある、尙『何々。して。』、『何々にして』の意義にも用ゐられる。

어디로, 가시요

どちらへお出掛けですか

앞으로, 나가시요

前の方へお進みなさい

뒤쪽으로, 다라났소

あつちの方へ逃げました

이길노, 감시다

こつちの道を參りませう

*기인으로, 하는말이요

個人にして言ふことです

양인으로는, 조선말, 잘한다

西洋人にしては朝鮮語がうまい

第五章 動詞・形容詞

第一節 活用及び時

朝鮮語の動詞及び形容詞は、國語のそれと同じく、語尾が色々に變化する、換言すれば、活用を有するのである。然し、その活用は極めて簡單で、而も動詞も形容詞も、活用の形式が同一であるから、一層學び易い。その活用の根基となる形は三種である——即ち朝鮮語の動詞及び形容詞は、凡て三段活用を謂ふことが出来る。

○動 詞

	第一段	第二段	第三段
爲す	하다	하야	하
見る	보다	보아	보
往く	가다	가	가
來る	오다	와	오
食ふ	먹다	먹어	먹으

斗は助辭なるを以て實際は之を除けるもの(例へば、(보)を語根とす)

信ず	受く	掩ふ	報ゆ	臥す	炙 ^ヤ く	捕ふ	着る	釣る	磨く	寒ぐ
밋다	밧다	덮다	깁다	눅다	굽다	잡다	넘다	낙다	닥다	막다
밋어	밧어	덮혀	깁하	누어	구어	잡아	넘어	낙거	닥가	막아
밋으	밧으	덮흐	깁흐	누	구	잡으	넘으	낙그	닥그	막으

暑し	養ふ	知る	附く	放つ	忘る	立つ	笑ふ	作る	合ふ	聞く
第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段
덥다	기르다	알다	붙다	놓다	잊다	섰다	웃다	짓다	맞다	들다
第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段	第二段
더워	길너	알아	붙혀	노하	이켜	쳐	우쳐	지여	마켜	드리
第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段	第三段
더우	기르	아	붙흐	노흐	이즈	쳐	우스	지으	마즈	드르

○形容詞

*小
なり
しと共通

「優る」は國語
に於ては動詞
なるも朝鮮語
に於ては形容
詞として取扱
はる

活用は、言葉々に依つて一々暗誦せねばならぬが、動詞も形容詞も活用の形式が同一である

第五章 動詞・形容詞

寒し	廣し	狹し	多し	*少し	鹹 <small>から</small> し	甘し	長し	短し	淺し	深し	高し	低し	優る	白し	黒し
춥다	넓다	좁다	:만라	:적다	싸다	달다	:길다	짧다	얕다	깊다	높다	낮다	:낮다	희다	검다
치워	넓어	좁아	만하	:적어	싸	달아	:길어	짧너	얕혀	깊혀	높하	나키	:나	희여	검어
치우	넓으	좁으	:만호	:적으	싸	다	:기	싸트	얕호	깊호	높호	나즈	:나	희	검으

上、第二段に於て、語尾が아、야、어、여の四音の中其の何れかに變化し、第三段に於ては、語根と同じ形若しくは으の音をこるから、至極わかりよい。たゞ語尾が入又は日で終つて居るものは、二段・三段に於て、語尾が往々他の音に轉化するから、特に注意して覺えて置かねばならぬ。然し、之も少し熟練さへすれば、何でもないのである。要するに言語を自由に操つる秘訣は、語彙を豊富にするこゝろ、動詞・形容詞の活用を的確に心得て置くこゝろに在るのだから、本章は特に注意して讀んで貰ひたい。

國語に、『勉強す』、『悠々たり』等の如く、漢字の熟語に用言を連ねて、活用させる動詞・形容詞があるが、朝鮮語でも、漢字音及び純粹朝鮮語にして、體言の形を具へたものを活用させるには『爲^ず』に當る『하다』を附するのである。

공부 (工夫) 하다

勉強す

입학 (入學) 하다

入學す

굉장 (宏壯) 하다

宏壯たり

적막 (寂寞) 하다

寂寞たり

튼튼하다

丈夫なり

뜻뜻하다

溫暖なり

미끈미끈하다

滑々する

끈끈하다

粘々する

○現在

動詞

語根

母 ㄷ
子 ㅌ
ㅌ ㅌ

形容詞

語根

母 ㅌ
子 ㅌ
ㅌ ㅌ

次に、直説法に就いて、動詞・形容詞の形を、現在、過去、未來の三種に分けて説明しやう。

一、現在

動詞は、語根に^ㄷ又は^ㅌを附する、^ㄷは語尾が子字なる場合、^ㅌは母字の場合に連なる。形容詞は、語根に單に^ㅌを附すれば宜い。^ㄷ及^ㅌの^ㄷ、^ㅌは動作の進行を表はすものである。故に形容詞には、之が附かないのである。

動詞

子 ㅌ
母 ㅌ

食ふ、食つて居る

見る、見て居る

形容詞

子 ㅌ
母 ㅌ

狭い

冷い

用例

밥을, 먹는다

飯を食ふ(―食つて居る)

개를, 본다

犬を見る(―見て居る)

길이, 좁다

路が狭い

물이, 차다

水が冷い

終聲が^ㄷの動詞の場合は、^ㄷを省いて、^ㅌを附する。

안다 (語根알)

知る、知つて居る

분다 (語根블)

吹く、吹いて居る

○過去

二段	動	入
다	形	入
다	形	入

○未來

語根	動	入
다	形	入
다	形	入

갓다ば想像、推量の意味にもなる

*오は實際は第一段に附くものなれど終聲ある語に對しては先づ三段

二、過去

動詞・形容詞共に、第二段の形に入다を附す。

비가, 왓다 (二段形다)

雨が降つた

집을, 지었다 (二段形지다)

家を造つた

지금보다만했다 (二段形만하다)

今よりも多かつた

三、未來

動詞・形容詞共語根に갓다を附する。

비가, 오갓다

雨が降るだらう

오늘도, 늦갓다

今日も遅れるだらう

빗치, 희갓다

色が白いだらう

맛이, 달갓다

味が甘いだらう

먹는다, 본다, 왓다, 오갓다等の다는、右の例に示した譯語の通り、口語としては、極めてそんざいな意味を表はす助辭であつて、何等尊敬の意が含まれて居ない、國語の『何々です』、『何々します』位の程度の敬意を含めるには、오又は소を附する。其用法に就て謂へば、소는子字で終る動詞・形容詞の第一段に付き、오は母字で終る動詞・形容詞の第三段*に附く。

動 술을, 먹소

酒を呑みます

動 담비를, 먹으오

煙草を呑みます

と同形に變化
せしめて連繫
せしむるが故
に此處にては
便宜上第三段
に附くと説明
したるなり

工*
夫

果*
實

이* 요의아(何々なり)보다(何々なり)より出づ、일다、일어、いと活用す點*

소, 으오

動 식를, 잡소
鳥を捕ります

動 고기를, 잡으오
魚を捕ります

形 물이, 적소
水が少ないです

形 수효가, 적으오
數が少ないです

形 빗치, 검소
色が黒いです

形 빗치, 검으오
色が黒いです

動 한문을, 공부하오*
漢文を稽古して居ます

動 총독부에, 덩기오
總督府に勤めて居ます

動 말타고, 가오
馬に乗つて往きます

形 빗치, 눈갓치, 희오
色が雪の様に白いです

形 이과실는, 맛이, 시오
この果物は酸すいです

形 이것은, 너무, 쓰르오
これは餘り短か過ぎます

오は、名詞に附く時は、요又は이요になる。요は母字で終る語に付き、이요は子字で終る語に附く。猶ほ이요は、元來이오であるが、音便上이요になつたのである。

무슨, 학교요
何學校ですか

지금, 몇점*이요
今何時ですか

니모자요
私の帽子です

어느나라사람이요

何國人ですか

오늘은, 몇칠이요

今日は何日ですか

요리가, 도청이요

此處が道廳です

動作の進行を表はす場合、國語では『何々して居る』といふので、内地人は動もするこ、之を直譯して『……고잇소』といふが、之は甚だ拙^{*}づい。斯ういふ場合には、朝鮮語では前段述べた通り、單に現在の形を其儘用ひれば宜いのである。

*하인은, 낮잠을자오

召使は晝寢をして居ます

*시방, 밥을먹소

今飯を食つて居ます

어디, 덩기시요

何處に勤めてお出ですか

날마다, 술만, 먹는다

毎日酒ばかり呑んで居る

右の様に、現在に於ける動作の進行を表はす場合のみならず、『出來て居る』『死んで居る』等の如く、過去より連續し來つた現在の狀況を表はす時も、内地人は動もするこ『……고잇소』と云ひたるが、それは不可^いない。斯う云ふ場合には、過去の形を其の儘用ゐるのである。

*모양이, 동구랏케, 싱겟소

形が眞ん圓く出來て居る

모도, 죽었나

皆死んで居るのか

*철합속에, 연필이, 들었소

引出しの中に鉛筆が這入つて居ます

未來を表はす助辭は、前段説明した것の外に리다가ある。리다는것다よりも未來の度が稍や軽く、

*리다의疑問形

*舌 盒

*貌 様

*時 下 方 人

업답테다^{*} 是也
다할테이다^{*} 是也
畧なり테다^{*} 是也
亦디다^{*} とする
も可なり

語根に連なる。(終聲ある語に連結せしむる場合は、語根を先づ第三段の形に同形に變化せしめた上で連繫せしむる。)又리다と同じ意味で、之よりも、少し不可嚙な助辭に따이ふのがある。

니닐, 차자가리다

明日お訪ね致しませう

저녁먹는, 집에, 업스리다

夕方は内に居らぬでせう

내가, 사다, 되리리다

私を買つて來て上げませう

너도, 하나, 주마

お前にも一つ與らう

곳, 오마고, 그릿소

直ぐ來るごさう謂ひました

尙現在完了、過去完了、未來完了の中、茲には現在完了だけを示して、他は餘り用ゐらるゝ場合が少ないから、略することゝする。現在完了を表はす助辭は、^{*}은又は^{*}이다で用言の第一段に連る。之が連體形になること、은又は^{*}던になる。

대단히, 재미있더라

大變面白かつたよ

약가, 오든이는, 누구요

先刻來て居た人は誰ですか

너가보든척은, 이척이안이요

私が見て居た本は此本ぢやありません

하나도, 업답테다^{*}

一つもないこと云つて居ました(ないそうです)

第二節 動詞と形容詞との中間に在る詞

朝鮮語には、動詞ももつかず、形容詞ももつかず、兩者の中間を往く品詞がある。それは잇다

(在る、居る)、**없다**(無い、居ぬ)、**계시다**(잇다の敬語)の三語である。この三語は、其の活用形式から見て、或る場合は動詞の如くなり、或る場合は形容詞の如くなるのである。

第一節第一項に説いた如く、動詞の現在直説法は、**먹는다**、**본다**の如く語根に**는다**又は**시다**を附するが、形容詞は、**크다**、**좁다**の如く語根に直に**다**を附するのみで、**는**又は**시**を必要としない。然らば前記の三語は、現在の直説法の場合その何れに依るかを謂へば、後者即ち形容詞と同様に扱はれるのである。

말이, 잇다

馬が居る

돈이, 잇다

錢がある

집에, 아모도, 없다

家に誰も居ない

돈이, 한푼도, 없다

錢が一文もない

지수가, 계시다

知事がお在になる

선생님은, 안계시다

先生はお在にならぬ

右に示した如く、この三語は決して一般動詞の様に、**잇는다**、**업는다**、**계신다**はいはぬのである。

次に、連體形の場合に就いて考へて見るに、動詞の現在連體形は、語根に**는**を附し、形容詞の場合、活用第三段の形に**시**を附するのであるが、以上の三語は之に倣はず、この場合は動詞と同じ

形をこるのである。

신용이, 잇는 사람이요

信用のある人です

양심이, 업는 사람은 업소

良心のない人はありません

귀국, 계시는이가, 부윤이요

彼處に在つしやるのが府尹です

尙疑問の場合は、있다, 업다の方は動詞と同じく、『느냐』の助辭をこるが、계시다は形容詞と

同じく、『냐』をこる。

어디, 잇느냐

何處に在るか

방에, 누가, 잇느냐

部屋に誰が居るか

양친이, 다, 계시냐

兩親が二人共居られるか

있다, 업다, 계시다の三語は、斯くの如く、或る時は動詞の形式をこり、或る時は形容詞の形式をこる特殊の言葉なので、特に一節を設けて、茲に説明した所以である。

第三節 連用法・連體法

一、連用形 は前節に擧げた動詞及び形容詞の活用中、第二段の形がそれである。實例を示せば左の通である。

조선말을, 가르쳐주시요

朝鮮語を教へて下さい

어디쯤인가, 물어보아라

何處ら邊か聞いて見ろ

第七節參照

房*

가르치다, 가르치
꽃다, 무리

잡다, 집어

올드다, 올나

넋다, 너어

오다, 와

보다, 보아

덜다, 더워

덜다, 더워

好(호)시, 조(조)라,

美(미)시, 부(부)럽다

부러워

누가, ^{*}싫어갓소

^{*}올나오시요

그냥, ^{*}더어두어라

비가와도, ^{*}가느나

^{*}보아도, ^{*}관계치안소

^{*}더워, ^{*}견딜수업소

너무, ^{*}미워치, ^{*}못먹겟소

誰か盜(ぬす)つて往きました

上つてお出でなさい (お上りなさい)

其の儘入れて置け

雨が降つても往くのか

見ても構ひませんか

暑くて堪えられません

餘り辛くて食べられません

連用形に야の助辭を附し、之を他の動詞で結ぶ時は『何々しなければならぬ』或は『何々でなければ何々でない』といふ風に、反語の意味になる。即ち、야は反語の緣語(緣語とはかゝりことば)である。

돈이, 잇시야, 사지

잘, 씹어야, 맛이나오

오늘, 안(안)에, 다하여야, 하겟소

교육이 잇는, 사람이라야하오

錢がなくちや買へないさ

よく噛みしめなくちや味が出ません

今日中にして仕舞はなくちやなりません

教育ある人でなくちや不可ません

形容詞の連用形に、하다を附するこ、例へば『好(호)이』が『好(호)く』になり『耻(치)しい』が『耻(치)しがる』の意味になる。

어는것을, ^{*}조화하시요

남을, ^{*}부러워하지마오

これが好きですか

他人を羨んではいけません

恥^{*}시 恥^{*}그렇
다, 恥^{*}그리워

怖^{*}시 怖^{*}스럽
다

憎^{*}시 憎^{*}미워
다, 憎^{*}미워

지다, 저, 지
와 활용^{*}스

차다, 차워

차다, 크다, 커

업다, 업서

부끄러워하는 것이, 계집이의, 耻^{*}しがるのは女の子の生れ付きです
버릇이요

무척워히쳐, 나오지안소 怖^{*}しがつて出て來ません

죄인이라고, 미워하지마시요 罪人だからさて、悪^{*}んではいけません

形容詞の連用形に、지다の助動詞を附するこ、『……になる』の意になる。

날이, 차워컷소 寒くなりましたし

એસ, 커지오 だんぐ大きくなります

모도, 업쳐컷소 みんな無くなりました

二、連體形 は動詞の場合は、時^{テンス}に依て作り方に左の如く五つの方法がある。形容詞の連體形に
は、別段現在ごか未來ごか、時に關係がないから、單に活用の第三段にしを附すれば宜いのであ
る。

動詞の連體形		現在	過去	未來
現在完了	過去完了	第一段に ^ニ を附す	第三段に ^シ を附す	第三段に ^ユ を附す
		第一段に ^ニ を附す	第三段に ^シ を附す	第一段に ^ニ を附す
			過去形に ^ニ を附す	

イ、現在の連體形

時*
方

求*
景

未*來の連體形
は國語の口語
にて適當に譯
し難きを以て
此處に^は現在
形に^は譯し置き
たり
現在完了に就
ては尙本章第
一節を見よ
已*前

조선말, 공부하는 책이, 잇소

朝鮮語を稽古する書物がありますか

*시방, 손님하고, 이야기하는 사람

唯今お客様と話をして居る人が主人です

이 주인이요

비오는 날에는, 아니하시요

雨の降る日には致しません

口、過去の連體形

식진 것은, 내버려라

こわれた(もの)のは捨てろ

답죄 할 사람이, 멧치느 잇소

及第した人が何人位居ますか

쇠을 애석, 사온 책이요

京城から買つて來た本です

ハ、未來の連體形

*구경갈 사람이, 만켓소

見物に往く人が多いでせう

이 것이, 팔 것이요

之は賣るのですか

떠날 때는, 통지하시요

出發する時は通知して下さい

ニ、現在完了の連體形

밋든 일이, 틀녜소

當てにして居た事が外れました

요 귀가, 내 잇든 집이요

此處が私の居つた家です

*이 전에, 대신 듣든 양반이요

嘗て大臣になつた方です

ホ、過去完了の連體形

念* 慮
理* 致

藥飯は糯米に
蜜、棗、松の
實など入れて
炊きたるもの

모아두었다든 돈을, 다, 써버렸소 貯へて置いた金を皆使つて仕舞ひました

그저, 왔든 사람은, 누구누구든가요 あの時來て居た人は誰々でしたかね

갓챌든 죄인은, 다 노앗소 囚へて置いた罪人を皆放免しました

未來の連體形は亦『何々すべき……』の指定にも用ひられる。

할말이잇거든, 나 할티하오 云ふべき事があるなら私に云ひなさい

스가가, 할일을, 남에게식히지마라 自分の爲すべき仕事を他人にさせては不可ません

이것은, 짐자는 사람이, 할일이 此れは正しい人の爲すべき事ではありません

아니요

未來の連體形に티이요を附すれば、『何々する筈です』又は『何々する積りです』の意になる。

모리, 써날티이요 明後日出發する積りです

너가, 히출러이니, 녀너마라 私がしてやる(積りだ)から心配するな

그런이치가, 업슬러인티 そんな譯はない筈だが

년봄에, 졸업할티이요 來年の春卒業の筈です

未來の連體形に만하다を附すれば、『何々する價值がある』或は『何々するに足る』の意味になる。

할번, 가볼만하오 一度往つて見る値打はあります

약밤도, 먹을만할것이요 藥飯も相當食へるものです

교장을, 할만한사람은아니요 校長になれる人ではありません

未來の連體形に것업다を附すれば、『何々するに及ばぬ』又は『何々する迄もない』の意なる。

일부리, 갈것업소

態々往くには及びません

내가, 특별히, 말할것업시, 여

私が特に申す迄もなく諸君が皆御承知の筈です

러분이, 다, 아실리이요

이말커말할것업시, 얼는웃슬니

彼れ此れ云ふに及ばぬ速く結着きまりを附けて下さい

여주오

未來の連體形に번하엿다を附すれば、『將に何々せんこした』の意なる。

물에싸키, 죽을번하엿소

水にはまつて死なうこした(溺死)

죽을번하엿다가, 간신히, 살아나소

死ぬ所でしたが危く助かりました

第四節 推量法

推量を表はすには、未來の形を其の儘用ひるのこ、一定の推量の助辭を用ひるのこ二つの方法がある。

一、未來形を用ふる例 之は第一節で説明した것다又は리다を附するのであるが、之は亦過去形に連續するこ、未來完了の時の推量を表はすここになる。

아마, 그리하겠소

多分さうでせう

갑시, 만켓지

高價たかいだらうね

應* 當

空* 日

無* 事

第七節第二項
參照

가십다の用法
は가보다の用
法と同じ

길이자니, 덩기기, 어렵겠소

道が悪るいから、歩くのに難儀でせう

*응당, 괴로우시리다

嚙ぞお困りでせう

*공일에는, 집에, 업스리다

日曜には、不在るすでせう

벌서, 다, 되었겠소

もう出来て居るでせう

*무스히, 갓스리다

無事に着いたでせう

二、助辭を用るる例 之には、가보다、가십다、ㄴ보다、ㄴ보다、ㄴ다의四つがあるが、보다は『見る』
こいふ動詞で、疑問の助辭가又はㄴに連接して、推量の意味を含む一種の合成助辭を形成したの
である。其の用法を示せば左の通りである。

現在 가[△]가[△]보다

往くらしい (第一段形に連る)

過去 갓[△]가[△]보다

往つたらしい (過去形に連る)

未來 갈[△]가[△]보다

往くだらう (未來の連體形に連る)

現在 오[△]ㄴ[△]보다

來るらしい (第一段形に連る)

過去 왔[△]ㄴ[△]보다

來たらしい (過去形に連る)

未來 오[△]겟[△]ㄴ[△]보다

來るだらう (未來形に連る)

ㄴ다は未來の連體形にのみ連續して、未來の推量を表はすに用ゐられる。

갈[△]ㄴ[△]다

往くだらう

비가 올 듯하다

雨が降るらしい

以上は、動詞に推量の助辭の連結した場合を示したのであるが、次ぎに形容詞に連なる場合を示せば、

더우니보다

暑いらしい (第三段形に連なる)

더운가보다

暑いらしい

더운 듯하다

暑いらしい

(過去連體形に連なる)

以上の場合普通の動詞のやうに—본다、—는다는決して謂はぬ所に注意が肝要である。

第五節 否定及び禁止法

一、事實の否定 を表はすには안타의助動詞を用ゐる。而して、안타は打消すべき語の上に置かるゝ場合、下に置かるゝ場合がある。前者の時は、안又は其の副詞形たる안이(아니)を其の儘語頭に附する、但し안は母字を以て始まる語の上には來ることがない、この場合には안이を用ゐるのである。次ぎに後者の時は、지なる助辭を補つて、지안타とするか、若くは之に更に하다の動詞を補つて지안이다として、打消すべき語の第一段に附するのである。

*. 눈이오니, 안가오

雪が降るから参りません

*. 작난만하고, 공부는 조금도 안이하오

悪戯許りして勉強は少しも致しません

선생님은, 아직, 아니오셨소

先生は未だお出になりません

*안타は안하、안호と活用す

作亂

과히, 칩지안소

さほご寒くありません

가보지도아나하고, 엇지, 알수가

往つて見もせず、さうして分るものか

잇나

二、能力の否定 を表はすには、打消すべき語の頭に吳を附するか、又は打消すべき語の第一段形に지못하다を附するのである。

질겨서, 못먹소

硬くて食べられません

포가엄스면, 못들어가고

切符がなければ這入れません

암만히도, 이기지못하고

こても勝てません

몸이압혀서, 일어나지못하겠소

身體からだ具合が悪くて起られません

右に擧げた例の外、動詞の未來の連體形に수업다 (或は수가업다) を附しても、同じく能力の打消しになる。

무엇인지, 알수업소

何だか分かりません

지금되여서는, 엇지할수가업다

今こなつてはさうすることも出来ぬ

尙否定として取扱ふべきものに、^{*}덜がある。之は常に打消すべき語の頭に附くが、前記の吳や수업다ほご打消の意味が強くない。

금년은, 작년보담, 덜칩소

今年は昨年程寒くありません

그렇게히서는, 덜되오

さうしてはうまく出来ません

*英語のlessと性質が似て居る

方 席

第五章 動詞・形容詞

*방석을, 알고안즈면, 불기가, 덜
압호오

座布団を敷いて座れば尻が餘り痛みません

第六節 命令法

朝鮮語には、國語の様に、語尾の活用によつて命令を表はす形はない。之を表はすには、一は直說法と同一の形を用ひ、一は라, 거라, 니라, 키의助辭を用ゐる。命令に直說法の形を用ゐるのは、英語나고、同じ筆法である。

들어오시오

お這入りなさい

잘당겨오시오

無事に住つていらつしやい

*우산밭고가오

傘をさして往きなさい

*잠간, 청히주오

一寸御呼び申して下さい

다름박질하고, 오나라

走つて來い

나를싸려오나라

私に隨いて來い

나가거라

出て往け

*이냥반을, 뒀시오, 가거라

この方かたにお供して行け

여기, 가만히, 섰거라

此處にじつと立つて居ろ

*죄농부흔타, 물어보아라

あの農夫に尋ねて見ろ

*兩 傘
暫間、請

*너라호나라
同じ

*兩 斑

*農 夫

托

짐을, 여긔 내려라

荷物を此處に下ろせ

잘 공부 하라고, 일너 주시오

よく勉強しろ (勉強する様に) 고謂つて下さい

*문을 닫으라고, 그리시오

戸を閉める (閉める様に) 고さう言ひなさい

또 놀너오기

また遊びに來給へ

이척 버리지 말기

忘れちゃ不可いかんよ

右の例に示した 고라, 오 (來る) に, 가라, 가 (往く), 서 (立つ), 있 (居る), 나려나 (起る), 자 (寢る) 以外の語には連ならぬ。而してこの 나라, 가라 は用言の第一段に續くのである。 기 も同様第一段に連なる。

라 は 보아라, 내려라 等の如く、第二段に連なるが 『何々せよ 고云つた』 等の如く、命令形が中間に狹まる場合には、第三段の形に續くことに注意せねばならぬ。

『何々して呉れ』の呉れは, 달나다의 助動詞で表はす。 달나다 は, 달나, 달나 고活用する。

보아 달나고, 부탁하엿소

見て呉れ 고頼みました

*환으로, 오십원보내달나고, 편지

爲替で五十圓送れ 고手紙を出しました

하엿소

술을, 부어다오

酒を注いで呉れ

잘, 믿들어다오

上手に造つてお呉れ

다고, 다오。は一種の慣用語であつて, 달나다 から出たものである。

命令が鄭重になれば、相手を勧誘し、又は同意を求むることになる。朝鮮語も同様であつて、之を表はす助辭に、자、외、日외다(日시다)がある。자는動詞の第一段に連なり、極めて親密の間柄若しくは目下のに對して用ひ、외は同じく第一段に連なり、同等の間柄に用ゐる。日시다は第三段に連なり、一番鄭重である。

산보가자

散歩に往かう

갓치、먹자

一緒に食ふぢやないか

이리、가외

こちらから往かう

술이냐、좀먹외

酒でも一つ呑まうぢやないか

달구경잡시다^{*}

月見に参りませう

여기、안줍시다

此處に座りませう

그리、하십시다

さう致さうぢやありませんか

第七節 疑問法

疑問表はすに二つの形式がある。一は直說法と同様の形であつて、其の語尾の調子を少し上げて發音すれば疑問になる。(但し何、何時、幾つ、何處等の疑問代名詞がある時は、多くの場合語尾の音調を上げなくとも問ひになる)今一つの形式は、國語と同じく、疑問を表はす種々の助辭を用ゐて之れを表はすのである。

一、直說法に同形のもの

조선사람이요

오늘, 오실터이요

하나도, 업소

이것보다, 크오

이것이, 무엇이요

멧나, 되오

언제, 오섯소

얼마잇소

어는것이, 좃소

(語尾を上ぐ)

朝鮮人ですか

今日御出でになりますか

一つもありませんか

之よりも大きいのですか

之は何ですか

何里位ありますか

何時お出で、したか、

いくらありますか

どれが宜いですか

(疑問代名詞ある故語尾を上げず)

二、助辭を用ひる例 疑問を表はす助辭には、**니, 이니, 녀, 이녀, 니녀, 나, 는가, 리가, 인가**

日닛가等があるが、**니, 이니**は主に小兒又は婦女子に對して用ゐる、**녀, 이녀, 니녀**は目下の者又は賤しい者に對して用ゐる、**는가, 리가, 인가**は**나, 녀**よりも稍や叮嚀で、同等の間柄又は目下の者に對し親密の意を含めて言ふ場合に用ゐる、**日**닛가、**입**닛가는最も鄭重の場合に用ゐる。而して之等の助辭は、動詞、形容詞、體言(名詞及び名詞形のもの)に依つて、各々用所に左の通り區別があるのである。

***日**닛가、**입**닛가よりも一層叮嚀なる助辭に**음**닛가、**이**음닛가あり

日^{*}의 앞의 日^{*}의 앞의
第三段に連なる

아^{*}는 元來 일다
(何々なりの意)なる動詞

나^{*}는 元來 일다
(何々なりの意)なる動詞

하^{*}는 元來 일다
(何々なりの意)なる動詞

거^{*}는 元來 일다
(何々なりの意)なる動詞

아침(朝)、저녁(夕)は朝飯夕飯の意にも用ひらる

始^{*}作

品詞	助	辭	接續の段
動詞	니, 느냐, 나, 는가, 님 [*] 가		一段
形容詞	니, 냐, 니가, 님 [*] 가		一段
體言	이니, 이냐, 인가, 임 [*] 가		一段

右表の用例を示せば左の通りである。

1. 動詞の場合

어디가니

何處へ往くの?

아침, 먹었니

朝飯を食つたかい

무얼, 하느냐

何をして居るのか

어디, 두었느냐

何處に置いたか

너도, 가나

お前も往くのか

다, 하였나

皆したか(濟んだか)

아는가, 모르는가

知つて居るのか知らんのか

벌써, 시작이, 되었는가

もう始まつたのか

어디, 갑니까

何處へお出かけですか

第五章 動詞・形容詞

들어가도, 관제처안치요
:영감도, 가십지요

這入つても差支ないでせうね
貴老あなたもいらつしやるでせうね

ㄹ、形容詞の場合

비가압흐니
가기실으냐
흰가검은가
니름이, 다름닛가

お腹なかが痛いの？
往くのが嫌いやか
白いか黒いか
名前なまえが違ひますか

ハ、體言の場合

이것이, 네척이니
그만한일을, 못한단말이나
이게, 무엇인가
무엇입닛가

これはお前の本かい？
それ位のこゝが出来ぬこいふのか
これは何だい
何で御座いますか

第八節 尊 敬 法

尊敬を表はす助動詞は시다一つだけである。之は시다、ぢ、시미活用し、動詞・形容詞の第三段に接續し、終聲ある語に連なるときは으시미なる。

영어를, 잘하시요

英語がお上手です

國語にてお天
氣お月様など
いふ如く鮮語
にも天に關
係あるものに
は尊敬詞を用
ふることもあり

내말, 드르시요

잘, 오섯소

두손으로, 밧으시요

스무가, 밧부시지요

찬성하여, 주시겟소

비가오신다*

私のいふこと言をお聞きなさい

よくいらつしやいました

両手でお受けなさい

事務が御多忙でせう

御賛成下さいませうか

雨が降つて居る(雨が降つて來た)

國語で『何々だ』『何々です』『何々で御座います』等の如く、終止に用ゐる助辭の如何に依つて、尊敬の程度が異なる様に、朝鮮語の終止にも色々の種類がある。『ㅎ다』(爲る)、『먹는다』(食ふ)、『크다』(大きい)等の如く、直説法の根本になる『다』は『何々だ』の『だ』位に相當する助辭であつて、別段尊敬の意が含まつて居ない。故に言葉を叮嚀に言はうと思へば、右の다に代ふるに他の適當な助辭を以てして、之を表はさねばならぬ。其の助辭及び用法は左表の通りであつて、段を重ねるに従つて、尊敬の度が増すのである。

連なるべき語	一段	二段	三段	備考
體言	요 (이요)	(이외다)	을시다 (이을시다) 읍니다 (이읍니다)	()内の助辭は終辭ある語に連なる時に用ゐらる

用言	
소	오 (으오)
소이다	외이다 (이옵니다)
습니다	읍니다 (으읍니다)
過去形、未來形及び終聲ある現在形に連なる時に用ゐらる	()内の助辭は終聲ある語に連なる時に用ゐらる。三段の形を略して이니다、읍니다とすることあり

우리 아버지요

私の父です

척사람의 딸이요

あの人の娘です

경성부의 부윤이옵시다

京城府の府尹で御座います

대단히 더웁습니다

大層お暑う御座います

눈이 올가보외다

雪が降るらしう御座います

고만가겟시다

これでお暇致します

방을 쓸엇소

部屋を掃きました

삼년전에 죽엇습니다

三年前に死にました

用言の第二段形(中止形)に요を附し、又は未來形、過去形に외요を附すれば、目下の者が長上に向つて、尊敬を含みつゝ、親みしの情を以て云ふ言葉になる。例へば子供や婦女子が、人に甘える様な場合に多く使用されるのである。

지금, 밥먹어요

今飯を食つて居ますよ

만히, 잊셔요

澤山ありますよ

*この形は尊敬の助動詞であり、中止形なり

*年歳、春秋

용치히주치요*

키리, 다라나치요

容赦し頂戴

あつちへ逃げて行きましたよ

以上は、助辭又は助動詞に依つて敬語を表はすものを擧げたのだが、『在す』、『賜ふ』等の如く、言語そのものが、當初より敬語に出來て居るものが朝鮮語にも若干ある。次に示した言葉で、上が普通語で、下がそれに對する敬語である。

:사 람 (人)

분 (お方)

:말 (話)

:말 음 (御話)

:나 (年齢)

*:말 년치, 춘추 (御歳)

:밥 (飯)

:진 지 (御飯)

죽 다 (死ぬ)

도라가시다 (亡くなられる)

잇 다 (居る)

계시다 (お在になる)

먹 다 (食ふ)

:자시다, 잡수시다 (召し上がる)

자 다 (寢る)

주무시다 (お寢みになる)

니 르 다 (謂ふ)

:엿 줍 다 (申上げる)

듯 다 (聞く)

듯 잡 다 (承る)

이분이, 이학교교장이시요

このお方がこの學校の校長さんです

두분이, 다가섯습니다

お二人もお歸りになりました

子弟、分

安寧 暫間

時方

말씀이, 을소

お話御尤もです

스죄가, 멧분이시요

御子息は幾人ですか

촌추가, 열마나 되십닛가

お幾歳でいらつしやいますか

도라가첫다는말은, 처음들엇습니다.

お亡かくれになつたこいふ事は始めて聞きました

교장은, 안계십니다

校長は御不在です

진지, 삼수첫소

御飯はお濟みですか

안녕이, 주무십시요

安寧にお寢みなさい(夜の挨拶)

잠간, 엇즐말씀이잇습니다

一寸申上げたい事が御座います

茲に注意すべきは、内地では如何に目上の者でも、それが若し自分の父母や兄姉のこゝであれば、他人の前では敬語を用ひぬのを普通とするが、朝鮮では、たゞひ身内の者でも目上の者であれば、他人に對して、敬語を用ひて話すのである。

아버지는, 어제, 서울가첫습니다

父は昨日京城へいつらしややいました

형님은, 시방안계십니다

兄さんは只今在いらつしやいません

朝鮮人が國語を話す時、往々直譯的に右の例の様なこゝを言ふこゝがあり、内地人の耳には如何にも異様に聞ゆるが、これは朝鮮の習慣であるから、内地人も朝鮮語を話す際は、自分の父母や兄姉のこゝでも、敬語を用ひて語さねば、朝鮮人の耳には、頗る不思議に響くから、注意せねばならぬ。これに反對に、内地では子供に對して、其親の前では『かうしなさい』、『お幾歳でいらつ

舉動

しやいますか』なき、いふ風に、敬語を用ひるが、朝鮮では絶対にさう云ふことはなく、子供ならば假令その親の前でも『かうしろ』『こちらへ來い』といふ風に決して敬語を用ひないのである。子供のみならず召使なきに對しても同様で、自分の子供や召使に對しては勿論、他人の召使でも之に對し敬語を用ひる様なことは全然ない。

助辭『が』『は』に相當する『가』『는』に關しては、第四章第一節で述べたが、特に深い敬意を含めていふ場合には、『가』の代りに『예치』、『는』の代りに、『예치는』といふのである。之を更に一層叮嚀にして『예음치』、『예음치는』といふこともある。

지스예치, 명녕하신일이요

知事が命令なされた事です

과장예치는, 언체부임하십닛가

課長殿はいつ御赴任になりますか

폐하예음치는, 경도로거동하섯

陛下には京都へ行幸遊ばされました

습니다

『誰それ君』『誰それさん』なき、人の名を呼ぶ時、之に附する適當な敬語が朝鮮語にないので、『君』や『さん』を其のまゝ用ひるところが流行する。即ち『박군』(朴君)、『김상』(金さん)なき、普通用ひられ、猶ほ例へば『안중식씨』(安重植氏)なきいふ風に『氏』も盛に行ひられるのである。

*情事を歌つた
歌謡などに
は女から情人

國語の『さん』や『様』ほぎ用法の範圍が廣くはないが、略ぼ之に相當する語に^{*}ないふのがあ
る。然しこれは『さん』や『様』のやうに、何處へでも普遍的に用ゐるこいふ譯には行かない、凡

を呼ぶ語として「主^{わし}」さんといふ様な意味に用ゐられることがある

そ左の様な場合にのみ用ゐられる。

하	나	님	神	様	(耶蘇教)
인	금	님	王	様	
:마	마	님	疱瘡の神	様	
선	성	님	先	生	
형		님	兄	様	
누		님	姉	様	
아	버	님	お父さん		
어	머	님	お母さん		
씨		님	御子様	(女)	
아	드	님	御子様	(男)	
장		님	按摩さん		

님は『さん』や『様』のやうに、人の姓名の下には決して附するこゝはないが、唯だ『孔子様』や『孟子様』といふ場合だけは例外に『공스님』『망스님』といふ風に用ゐられる。

第六章 接續詞

接續詞には、『又』『而して』『然れども』の如く、一成句と一成句とを接續するものこ、『何

場* 米は買ふことを賣ると云ひ賣ることを買ふと云ふ

盗* 賊
艱* 辛

故* 形容詞に連な

々するこ。』『何々なれば。』『何々して。』等の如く、中止的接續の二種がある。先づ後者の例を舉ぐれば、左の通りである。

一、『何々して。』のてに相當する語に及及びコがある。及は連用形即ち第二段の形に連なつて、動作の連續密接なる場合に用る、コは動作に稍や間隔ある様な場合に用ひられる。然しこの用法の區別は、必ずしも絶對的のものではない。

안켜쳐, 자시요

座つてお喫りなさい

장에가쳐, 쌀을팔어왔소

市へ往つて米を買つて來ました

놀고, 갔소

遊んで往きました

하나는크고, 하나는적소

一つは大きく一つは小さいです

二、コよりも一層間隔を置く場合、例へば『何々して而して』或は『何々して置いて』なごの意味を表はすには다가を用る、是は第一段又は過去形に連なる。

가다가, 길에쳐, 비를마쳤소

途中で雨に遇ひました

도적질을, 하려다가, 잡혔소

泥棒をしようとして捕へられました

식달등안을, 알엇다가, 간신히,

三月間患らつてやつと癒くなりました

살아났소

三、『何々だから。』のからは、니, 및가, 는고로等で之を表はす。및가는更に및간, 및간드로こも詭まる。니及び및가는動詞第三段に、는고로는第一段に連なる。

狼*
狼

則*

體*
己の終聲を有する語ならば第一段に連る

體*

안소

그 사람이 잇섯스면、이런^{*}남피가

あの人が居つたらこんな失敗はないのに

엄슬터인데

五、『何々するこ』の意を表はす接續詞は、니、닛가、닛간、즉^{*}等である、즉は過去の連體形に限

つて連なり、其の他は第三段の形に連なる。

어름을 먹으니까、대단히、쉬워하오 氷を飲んだら大層涼しいです

그 이야기를 듣고、크게 놀랐데다 其の話をすると、大に驚いて居ました

六、『何々しながら』の意を表はす接續詞は、면치である。之は亦면침^{*}も訛まるが、用言の第三

段形を連なる。

소리를 하면치、춤을 추오

唄を唄ひながら踊を踊ります

알면침、모르는 체하다^{*}

知つて居ながら知らぬ振する

술을 먹으면치、밤을 시오

酒を飲みながら夜を明かします

七、『何々のみならず』の意を表はす接續詞は、은아니라、은더러、은외라であつて、用言の場合
は連體形に連なり、體言の場合には直に之に連なるのである。

두루퉁이 은아니라、죄고리까지、
周衣^{ツルマキ}許りでなく下衣^{チヨリ}まですつかり濡れました

다 커졌소

비가 올뿐 아니라、바람도 부오
雨が降つてる許りでなく風も吹いて居ます

形容詞の場合
は「^ニ」として
第三段に連な
る
滋^{*}味

洋^{*}人

過去形、未來
形に連なると
きは「^ナ」とな
る

醫^{*}員

크기가 클뿐더러, 무겁기도하오

大きさが大きい許りでなく重さもあります

八、『何々したが』『何々だのに……』等の意を表はす接續詞は「^ニ」で、用言の第一^{*}段及過去形、未來形に連なる。體言の場合には、^ニ「^ニ」である。

나도, 가보았는디, 조금도, 스^{*}

私も往つて見ましたが少しも面白くありませんでした

미엄습되다

압흐지도안은디, 웨을어

痛くもないのに何故泣くのだ

양인인데, 일본말을, 왜, 잘하오

西洋人のくせに日本語が素敵にうまいです

九、『何々なれども』の意を表はす接續詞は、^ナ「^ナ」であつて、用言の第三段又は^{*}過去形、未來形に連續する。尙同じ意味のものに^ナ「^ナ」がある、是は常に終止形に連なる。

빗츠고우나, 맛이업소

色は美しいが美味くありません

꽃은만히피엇스나, 열미는, 하

花は澤山咲いたが實は一つもありませんでした

나도, 열나지안히소

의원에게보였소마는, 엇지할수

醫者に見せたがどうすることも出来ませんでした

가업섯소

次に『又』『而して』等の如く、一成句と一成句とを連結する接續詞の主なるものを擧ぐれば、左の通りである。

又、且、猶

도

假*
令

手*
甲

丹*
粧

故に
然しながら

或は

例へば

そうして、然而

それでも

如何かなれば

그런고로

그러나, 하나, 하지마는

혹

가령*

그리쳐, 그리하교, 그리고

그리도

왜그러냐하면, 엇지그런고하니

第七章 副詞・感動詞

第一節 副詞

國語の副詞に、『直ぐ、豫め』等の如く本來副詞たるもの、『固く、早く』等の如く用言から出たものこの二種類がある通り、朝鮮語にも同様二種の副詞がある。先づ用言より作る副詞から示せば、

一、用言の第一段形に^기を附する例 是は亦更に^{시리}を添加してもよい。

다라나지 못하게, 수갑을 칠너두어라 *
逃げられぬ様に手錠をはめて置け

단장할, 잘하엿스니, 엿부게보오 *
お化粧を上手にしてあるので美しく見えます

:미우, 땀뻘하게, 되었소

大層暖くなりました

누르면서, 소리가나게시리, 민들었소 押すこ音の出る様に拵えてあります

二、形容詞の第一段形に이音又は히音を添加する例 이及び히는、連なるべき形容詞の終聲の如何に依つて、左の如く或は니になつたり、或は치になつたりする。

:멀 다 (遠い)

:멀 니 (遠く)

넓 다 (廣い)

넓 니 (廣く)

빋 부 다 (忙しい)

빋 비 (速く)

깊 다 (深い)

깊 히 (深く)

갓 다 (同じ)

갓 치 (同じく)

:만 타 (多い)

:만 히 (多く)

『平安하다』『부주런하다』等の如く、하다で活用させる形容詞に히を附すれば、矢張り副詞になる。

평안하다 (無事なり)

평안히 (無事に)

:대단하다 (甚し)

:대단히 (甚しく)

튼튼하다 (丈夫なり)

튼튼히 (丈夫に)

부즈런하다 (懇ろなり)

부즈런히 (懇ろに)

웨, 그리, 빋비가시요

何故そんなに急いでお歸りですか

좀더, 김히, 과라

も少し深く掘れ

기초를, 튼튼히, 차야 할 것다

基礎を堅固に築かなくちやならぬ

죄스름, 부스런히, 가르친다

弟子を懇切に教へる

三、肯定・否定・應答・呼かけの副詞 肯定の副詞は네(네)、否定の副詞は아니오であるが、下賤の者や子女に對して肯定するときは『오냐』と謂ふ、又國語の『ウン』と同じ程度位の『오』があり、尙子供の呼かけに對する返事によく『워』といふことがある。長上に對して否定するときは、아니외다、아니올시다など敬語を含んだ言葉を用ひる。反對に目下の者に對しては아니다と謂ひ、同等親密の間柄には아니、아니야などをを用ゐる。

네, 그러합니다

はい左様で御座います

아니요, 그러치 않습니다

い、え左様では御座いません

強い肯定即ち對手の言ふことに、強く同意を表する時は、**암**又は**아무렴**を用ひ、強い否定には、**원**結を用ゐる。

암, 그러코말고

え、さうですもこ

아무렴, 다, 그러치요

勿論皆さうですよ

원결, 누가, 그런일을 할 것소

い、や誰がそんなことをするもんですか

四、呼かけの副詞 普通呼かけに用ゐる副詞は**여보**であるが、之は**여보오**(これを見よ)の約まつたのである、之を叮嚀にすれば、**여보시요**、**여봅시요**になる。一層叮嚀に**이방반**(このお方)と

*此處に呼かけの副詞といへるも實は一の

成句にして決して單純なる品詞にあらず但だその用法より見て此處には便宜副詞と謂へるなり

作* 亂

いふこともある。目下の者や下賤の者には이예を用ゐる、之は이의야(この小兒よ)の約まつたのである。同等又は遠慮のない間柄には여보게を用ゐる。この外呼かけに用ゐる言葉には、이것보아라、이것보아、이것보게、이것보시요なきがある。

여보、어디가요

もしく何處へ往くんですか

여보시요、말씀、좀무릅시다

もしく一寸お尋ね致します

이예、작난하시마라

こら悪戯をしちやいかん

應答の際『사아』といふ風に、返事に躊らふ意を表はす副詞は글썩である。之を叮嚀に成語にして글썩요、글썩을시다といふ場合もある。又ものを云ひ出す前、或は言葉言葉の間隔を調節するに用ふる『あのー』等の副詞は、이(このー)、그(そのー)、저(あのー)で表はす。又거시기(或は거시기)なき、いふこともある、更に右兩者を連結して저거시기なき、もいふ。此の種の副詞は、甚だつまらぬ様ではあるが話の間にちよいこ云ふ副詞を挿むと、言葉が如何にも流暢に聞えるのみならず、落付きが出て來るのであるから、よく實地の應用に心掛けねばならぬ。

第二節 感動詞

感動詞には、獨立して用ゐらるゝもの、語の結びこして用ひらるゝもの、呼かけこして語尾に附せらるゝもの、この三種に就いて、左に例を示す。

一、獨立して用ひらるゝもの

엇더케, 할고。

どうしやうかな

거기도, 잇습되다구려。

彼處にもありますね

준비가, 다 되엿구려。

準備がすつかり出來たね

인죄가는구려。

今出掛けるんだね

바람이, 시원하구려。

涼しい風だね

三、呼びかけに用ひらるゝもの

呼びかけに用ひられるものは、아又は야であるが、아は終聲ある語に連なり、야は終聲なき語に連なる。

복동아。

福童よ

옥희야。

玉姫よ

이놈스식아。(이놈아)

此の野郎(此奴め)

마부야, 경마잡어라

馬子よ轡をこれ

第八章 助 辭

本章では、第四章で説いた助辭以外の種々の助辭に就いて説明するここにする。

一、『買ひに往く』等の如く、目的又は意志を表はす『に』は리, 으리를用ひる。리는母字で終る語に, 으리는子字で終る語に連なる。

* 표사려가오

은행에 돈차즈려갓다왔소

밤먹으려갓소

시찰하러왔소

짐밧으려보내시오

切符買ひに往きます

銀行へ金を引出しに往つて來ました

飯食ひに往きました

視察に來ました

荷物を受取りにやりなさい

二、

『ごころこで』の如く場所を示す『で』はえ、外で表はす。

학생들이 운동장에셔노오

무대에셔 춤을추오

*이층에셔 구경하오

외국에셔 공부하엿소

바다에셔 차흥을하오

여기셔 하여라

어디셔 샅습닛가

學生達が運動場で遊んで居ます

舞臺で踊を踊ります

二階で見物します

外國で勉強しました

海で戰をします

此處でしろ

何處で買ひましたか

三、

『ごころこから』の『から』は、前項と同じくえ、外で表はす。

동경에셔 대판까지

최상우에셔 떠러켓소

형남에셔 편지가왔소

東京から大阪まで

机の上から落ちました

兄さんから手紙が來ました

외에서, 부산에서

京城から釜山まで

여기서, 거기요

此處から何里ですか

에。外。は。凡。て。の。場。合。に。用。ひ。る。が、外。は。地。名。及。び。指。示。代。名。詞。 (此處、彼處、其處、何處等) にのみ
連。な。り、右。例。に。於。け。る。が。如。き『上。か。ら』『兄。さ。ん。か。ら』等。の。如。き。場。合。は、必。ず。外。外。を。用。ひ、決。し
て。外。は。用。ひ。ぬ。

四、時を表はす『から』は부터、부터である。

오늘부터, 여름휴가요

今日から夏休みです

예로부터, 그러케하는습관이요

昔からさうする習慣です

오전아홉시부터, 오후두시까지

午前九時から午後二時まで

이월부터, 알엇소

二月から病わづらひました

前項の場所を表はす外に、更にこの부터を添加して用ひることもある。

여기서부터, 커다라잇는대까지

此處からあの橋のある所まで

五、『まで』は까지, 까지で表はす。

정월부터, 칠월까지 기다려도,

正月から七月まで待つても返濟して呉れません

감해주지안소

그까지넘겨주세요니, 참무안

そこまで御心配かけて誠に面目ありません

합니다

念慮、無顔

*金の正音は金
なれど姓に用
ひたる場合に
限り金と發音
す

려비외지내줄것업소

旅費まで出してやる必要ありません

저외지가외쉬자

彼處まで往つて休まう

六、『何々だこ(ーいふ)』の『こ』は라고、이라고で表はす。

前者は母字で終る語に、後者は子字で終る語に附く。

나는박원주라고하오

私は朴元周と申します

이것은호랑이라고하느즘성이요

これは虎といふ獸物です

무엇이라고하느것이요

何といふものですか

この고は往々略して、單に라、이라고もいふ。

*김동식이라(고)하오

金東植と申します

공주라(고)하느데를아시오

公州といふ所を御存じですか

以上は名詞に附く場合の『こ』であるが、説明語に連なる場合は單に고といふ。尤も前項の라고、이라고も嚴格に謂へば、라、이라고は説明語であるから、『こ(ーいふ)』は凡ての場合고であるといつても差支はないのである。

곳오겟다고하되다

直ぐ來るこいつて居ました

벌치나갓다고하되다

疾うに歸つたこいふこゝです

집에잇다고그리드나

家に居るこ云つて居たか

この고も元來はき고の省略であるが、更にきも고も左の通り、共に之を略しても差支はない。

時* 方
尾星、長壽

苦* 草

吩* 付

終* 日

시방가러가갓다 (고) 그러라

只今持つて往くこさう謂へ

미성을보면, 장수한다 (고하) 오

慧屋を見るこ長生きをするこ申します

조선사람은, 대단히, 고초를조와

朝鮮人は大層唐辛が好きだこ謂ふここです

흐다 (고하) 오

七、推量の『-고』思ふ』の『-고』は^고줄又は^고줄^고로で表はす。そして動詞・形容詞の連體形に連なるのである。

である。

못하는줄알고, 분부하지안앗소

出來ぬだらうこ思つて言付け^{いひ}ませんでした

누가들어온줄알고, 곳, 달아났소

誰か這入つて來たこ思つて早速逃げました

차즈오실줄알고, 종일기다렸섯슴

御訪ね下さるだらうこ思つて終日待つて居ました

니다

八、物^고物^고를並べる場合の『-고』は와、과で表はし、와は母字で終る語に、과는子字で終る語に

連なる。

벼투와 먹

硯^고墨

붓과 종의

筆^고紙

개와 고양이가, 하마리식잇소

犬^고猫が一匹づ、居ます

사람과 동물은, 다르오

人間^고動物は違ひます

와、과의代りに、動詞下に接續詞고を附し、하고^고として用ゐるこがある。これは助辭ではないが

와、과こ同じ意味に用ゐるので、左に例を示して置く。

어머니하고 갖치갓소

お母さんこ一緒に往きました

쌀한되하고、사랑한근사오나라

米一升こ砂糖一斤買つて來い

이것하고、밭구어주오

是こ取換へて下さい

九、

『何々も』『何々しても』のものは도で表はす。

술도 잇고과즈도 잇소

酒もあり菓子もあります

포도주도、먹을만하지마는、맛이

葡萄酒も美味おいしいが甘あまいので澤山は飲めません

다닛가、만히는、먹지못하오

가보지도안코、아는척한다

往つて見もせずぶらに知つた振する

암만남으리도、뜻지안소

幾ら吐しゃつても聴きません

들어가도관계치안소

這入つても構ひませんか

돈만만히잇쳐도、사람이、신용치

金ばかり澤山あつても人が信用致しません

아니하오

비가와도、가야지

雨が降つても往かなくちやならぬ

一〇、『何々でも』のものは라도、이라도*で表はし、前者は母字で終る語に、後者は子字で終る語

に連なる。

어린이라도、관계치안소

子供でも構ひません

體*

關* 係

* 이라도のいは元來「何々なり」に相當する動詞なり

과스라도, 맛이잇쇠야, 만히먹지
조선집이라도, 살아보닛가, 관계

菓子でも美味しくなくちや澤山食へんよ
朝鮮家屋でも住んで見るこ工合の悪くないものです

치안습되다

일본옷이라도, 조흔것은갑시만소

日本服でも上等のものは値段が高いです

一一、

『茶でもお喫りなさい』なごのでもは、
이^나で表はす、兩者の用法は前項に同じ。

차^나, 잡수시요

お茶でもお喫りなさい

거문고^나, 라보지

琴でも弾いて御覽

술이나 먹어볼가

酒でも飲んで見るかな

이게^나, 쪼게^나, 맛찬가지요

此れでもあれでも同じことです

一二、

比較するこきの『より』『よりも』は
보다或は보담で表はす。

이것보다, 월^췌낫소

これよりずつこ上等です

자^나보다는, 키가크다

君よりか丈が高い

그^러케하시^는것보^담은, 이^러케

さうなさるよりは、かうなさる方が宜しう御座いませ

하시^는것이, 좃^켓습니다

う

기^차보^담비^행기^가, 빨^으오

汽車より飛行機が速いです

一三、

『^사へ』は^만で表はす。

돈^만잇^섯드^면, 샅^슬걸

金さへあつたら買つたのに

술만 먹고 잇스면, 아무 불평도 업는

사람이요

酒さへ飲んで居りや何の不平もない男です

울기만 하면, 되는 줄 아나

泣きさへすれば濟むと思ふか

틈만 잇스면, 갈터인디

暇さへあれば往くの다가

第九項で説いた『も』に相當するども、用途の如何に依ては『さへ』の意味になることがある、即ち左の如し。

밤도 못먹는디, 옷을 엿지 사겟소

飯さへ食へぬのにごうして着物が買へませうか

소학교도 낙제한놈이, 중학교에,

小學校さへ落第した奴が中學校へ入學したい云ふの

입학하련단말이나

か

一四、『何々毎に』は마다或は마당で表はす。

집마다, 괴를 달았다

家毎に旗がたつて居る

날마다, 비가 오오

毎日雨が降つて居ます

해마당, 염병이 대처하오

毎年疫病が猖獗します

올겨마당, 무얼가 귀오오

來る度毎に何か持つて來ます

一五、『何々したい』のたいは고심다で表はす。고は第六章で述べた接續詞であつて、之に심다

いふ一種の助動詞が加はつたのである。

가고심다

往きたい

染病、大穢

심다は심히、
심호と活用す

술을 먹고 싶어요

酒が飲みたいです

보고 싶어요

見たいか

一六、『何々だ^{△△}やら』の如く名詞形のものに附く[○]やは[○]인지[○]で表はすが、『何々^{△△}する^{△△}やら』の如く動詞に附く[○]やは[○]는[○]지、『大^{△△}き^{△△}い^{△△}야^{△△}ら小^{△△}さい^{△△}야^{△△}ら』の如く形容詞に附く[○]やは[○]는[○]지又は[○]지[○]で表はす、名詞の場合は左の通り。

어느나라 사람인지 알 수가 없소

何處の國の人やらわかりません

박쥐는, 시인인지 짐승인지, 알는

蝙蝠^{げも}は鳥やら^{げも}獸物やら一寸見た所では區別がつかませ

보기에는, 구별하기가 어렵소

ん

動詞に附く場合は、現在形(活用第一段)、過去形、未來の連體形等の其の何れにも連なる。

第五 章 第一 節 參 照

對 答

어디[△]서[△]노[△]는[○]지, 밤도 먹으려[○]아[○]나와
낮[○]잠[○]을, 자[○]는[○]지, 불[○]너[○]도, 대[○]답[○]도

何處で遊んで居るのやら飯も食ひに歸らぬ
晝寢をして居るのか呼んでも返事もせぬ

아니 해

어[○]되[○]로[○]갓[○]는[○]지, 알[○]수[○]가[○]잇[○]서[○]야[○]지

何處へ往つたやら分るものか

기[○]차[○]가[○]들[○]어[○]왔[○]는[○]지, 기[○]적[○]소[○]리[○]가[○]들

汽車が這入つて來たのか汽笛の音が聞える

닌다

출[○]장[○]나[○]갓[○]다[○]닛[○]가, 오늘[○]은, 집[○]에[○]업[○]

出張したさうだから今日は内に居ぬかも知れません

슬[○]는[○]지[○]도[○]모[○]르[○]르[○]겠[○]소

연체죽을는지, 미리알수가잇겟소
いつ死ぬるか前以てわかるものですか
形容詞の場合は、는지는活用第三段の形に_ニを附して―即ち動詞に於ける未來の連體形と同様の形にして之を連ねるのである。

엇덧케하면, 조졸는지, 아조, 질
ごうしたら宜いやら全く閉口するわい
식일체

ㄴ지는活用第三段形に直ぐ連なる。

김픈지얏픈지, 감감해석, 알수가
深いやら浅いやら眞つ暗でわからぬ

업다

큰지작은지, 비교해보면, 곳알겟소
大きいか小さいか較べて見たら直ぐ分るでせう

七、『何々してから何年になる』なごのでからはㄴ지로表はし、動詞活用の第三段に連なる。
지는普通가의助辭を添加し、ㄴ지가_ニして用ひる。

죽은지가, 멧히나되엿소
死んでから何年位になりますか

조선나오신지가, 오리되섯소
朝鮮へ入らしてからお久しう御座いますか

발차한지가, 삼십분가량지냈소
發車してから三十分程経ちました

一八、『だけ』『のみ』は만, ㅁ으로表はす。만は體言即ち名詞形のものにのみ連なるが、ㅁ은は動詞にも連なる。而して現在の動詞に連なる時は、其の活用第三段形に_ニを附し―即ち未來の連體形_ニ爲して、之を連ね、過去の動詞に連なる時は、過去形に을を附して之を連ねるのである。

慥*
慥

第五*
參照 章第三節

吩*
付

이와갓치、이를외주시니、대단히

此の様に御配慮下さいまして誠に有難う御座います

고맙습니다

이처럼、일부러、차자오시니、황*

斯様に態々御訪ね下さいまして恐縮に存じます

송합니다

개처럼、몽롱지즈오

犬の様にワン／＼吠えます

二〇、『の通り』『の儘に』は타로で表はす。타로는名詞形には直に連なり、動詞の場合は現在及

過去の連體形に連なる。

마음타로하시요

御隨意に(心の儘に)なさい

간장을외지말고、그타로자시오

醬油をつけずに其儘お喫りなさい

명령타로、히야할것소

命令通りやらなくちやならぬ

키놈이가는타로、따라가보자

彼奴の往く通りついて往つて見やう

되는타로、내버려두시오

なるが儘に放つて置きなさい

분부할타로、히두어다

いひ付けた通りして置け

二一、『何々したきて』のきては、들で表はし、過去の連體形に連なる。

암만란식한들、쓸타업소

いくら嘆息したきて駄目です

직급되여셔는、암말할들、듯지

今こなつては幾ら言つたきて承知しないでせう

안кет소

禽* 獸

番*

曲* 情
相* 關

影* 響

第五項參照
滋* 味
景* 致

盡* 力

二三、『何であれ彼であれ』の意を表はすには、든지、い든지を用ひ、前者は母字で終る語に、後者は終聲ある語に連なる。

사람이든지、금슈든지、다、하나
人間であれ禽獸であれ皆神様の御造りになつたもので
남이、민드신것이요
す

닐일이든지、모리든지、한번차자
明日でもあさつてゞも一度やつて來給へ

오기

돈이잇든지、업든지、꼭청마라
金が有らうが有るまいが心配するな

하든지、마든지、상관마라
しやうがしまいが構ふな

그럭、갓든지、안갓든지、아무
其時往つたらうが往かなかつたらうが何等の影響もあ

영향도업소
りません

二三、『何々すればするほぎ』の意を表はすには手号を用ひ、未來の連體形に連なる。

깊히연구할수록、즈미가잇소
深く研究すればする程面白い

올너갈수록、경치가죇습니다
登るほぎ景色が宜う御座います

만홀수록、편리하오
多いほぎ便利です

二四、『何々する様に』は도록で表はし、動詞・形容詞の活用第一段に連なる。

잘되도록、진력하여주십시오
うまく行く様に御骨折を願ひます

보름날까지는、도착이되도록、보
十五日までは到着する様に御送り下さい

* 委に連なると
きはト号とな
る

내주시요

얼른, 허가가나도록, 부탁하고요

速く許可が出る様に頼んで御出でなさい

시요

* 조토록하여두어라

い、様にして置け

二五、『何々せむ(欲する)』の如く、意志を表はすには、動詞の活用第一段形に려고(려고)を

附する。

나도, 한번, 가보려고합니다

私も一度往つて見やうと思ひます

이삼일안에, 떠나려고합니다

二三日中に出發しやうと思ひます

무얼하시려고, 이터케, 일찍이오

何を爲さらうてこんな早く來られましたか

첫소

준비히두려고, 몬키왔습니다

準備して置かうと思つて先きに參りました

려고의고는、左の如く、往々之を略することもある。

스동차로, 가려고

自動車で往かうと思ひます

엇더케하시람. 닛가

どう爲さるお積りですか

本來は、가려고오, 하시람 닛가謂ふべきだが、此の場合をも省略して差支ないのである。

二六、所有格『의』は의で表はす。

이사람의집이요

この人の家です

관청의 명령은, 잘 지켜야 하겠소

官廳の命令はよく守らねばなりません

의는實際の會話では、よく에을發音される。猶この의は往々省略されることがある。

이 사람 (의) 집이요

この人の家です

학교 (의) 이름이 무어냐

學校の名は何といふか

*第三章第一節
乃至第三節參照

代名詞の나(我)、네(汝)、우리(我等)、누(誰)、언제(何時)、어디(何處)等は、代名詞の條項で說

明した如く、其の儘所有格にもなるので、更に의の助辭を添加しなくともよい。

所有格は亦『人』音の添加に依つて表はさるゝことがある。

*어디 사람이요

何處の人ですか

*대문 사람이 가보오

大邸の人らしいです

*침아에서, 빗방울이 떨어진다

庇ひさしから雨滴あまだれが落ちる

*바닷물이, 밀었소

潮(海の水)が満ちました

*빛사람이, 비를 끼오

船頭(船の人)が船を漕ぎます

*담뱃대와, 저더리를 가시오나라

烟管(烟草の竹)と灰落しを持つて來い

너스들은, 안방에잇소

女子共は内房(内の部屋)に居ます

*内—안

*煙草—담뱃

*船—선

*海—바다

*雨—비

*大邸—대문

*何處—어디

第九章 數 詞

第一節 數の稱號

數の稱呼は、國語に『一つ二つ三つ』といふ工合に、純粹の國語でいふものと、『一二三』といふ風に漢字の音を借りていふものとの二種があるが、朝鮮語に於ても、之に相當する二様の稱呼がある。但し前者は、國語に於ては[○]こを(十)までを限りとし、それ以上になるこ十一、十二といふ風に、漢字音に依らねばならぬが、朝鮮語では、九十九までは純粹の朝鮮語でいふこが出來る。この意味に於て、數詞は、朝鮮語の方が發達して居たこも謂ふここが出来やう。

一、純朝鮮語の數詞

하	나	하	둘	二つ
셋	셋	넷	넷	四つ
다	다섯	여섯	다섯	六つ
닐	곱	여덟	여덟	八つ
아	홉	열	열	十(こを)
스	물	십	십	三十
:마	십	사십	사십	五十

예	순	六十	일	흔	七十
여	든	八十	아	흔	九十
열	하나	十一	스	블	들
열	셋	三十三	마	흔	넛
신	다	섯	예	순	여
일	흔	닐	곱	여	든
아	흔	아	홉		홉
					九十九

商人なきが、品物を數へたり、入れ物から入れ物へ移したりするこき、調子をつけて數を呼び上げるのに、하나^{*}이^{*}로^{*}구^{*}나^{*}、둘^{*}이^{*}로^{*}구^{*}나^{*}といふ風に、數詞にい로^{*}구^{*}나^{*}といふ言葉を附けて呼んで行き、最後に이^{*}로^{*}다^{*}といふ言葉を附し、例へば여^{*}섯^{*}이^{*}로^{*}다^{*}の如く結ぶのである。之は普通の人には別に必要はないが、かう云ふ數へ方もあるといふことを知つて置くがよい。

二、漢字音に依る數詞

일	삼	오	칠	구	一
이	사	육	팔	십	二
					三
					四
					五
					六
					七
					八
					九

百、千、萬等は必ず一を附し**일백**(二百)、**일천**(一千)、**일만**(一萬)といふ風に呼ぶ。一個、二枚等の如く助數詞に冠する時は、一つから六つまでの場合と、八つ及び二十の場合とに限り次の様になるが變化する。

原形通り다섯
여섯에도よ
시

假量

한は亦『凡そ』の意味を有する副詞の働きを爲すところがある。

리수가、**한오십리가량**되오
수효가、**한이천이나**된다오
里數が凡そ五里程あります
數が凡そ二千位だそうです

『二つ三つ』などの如く、數詞を二つ重ねて、概數を表はす時は、亦左の通り形を變へる、但し『六つ七つ』以上はない。

한	둘	한	둘	셋	넷	다섯	여섯
一つの	二つの	三つの	四つの	五つの	六つの	七つの	八つの
두	셋	넷	다섯	여섯	일곱	여덟	아홉
二つの	三つの	四つの	五つの	六つの	七つの	八つの	九つの

右の中한들、두엇、셋넛、너넛の四語は、二三人、三四匹などの如く助數詞に冠する場合は、次の様に變化する。

한	두	셋	너
한	두	어	너
셋	너	더	너
너	너	더	너
너	너	더	너
너	너	더	너

三つ、五つなど、明かに數を謂はず、漫然と多數の意を表はす詞に、여럿여러といふのがある。之が助數詞に冠せらる、時は여럿여러なる、猶ほ『十とをあまり』の意を表はす詞に열남은열남은がある。

여럿이、함께왔소
大勢揃つて來ました

여러번、차키갓는디、한번도、맛
數回訪問しましたが一度も會ふことが出來ませんでした

나지못하였소
た

돈이、여러만원이잇소
金が數萬圓あります

나히、열남은살이되여서、비로소、
年が十歳あまりになつて始めて學校に入學しました

학교에입학을하였소

第二節 曆 日

年月日の稱呼は、數詞と密接な關係があるので、便宜本章の中で説明することにする。

一、日の稱呼は左の如くであるが、十日までは『初何日』と謂ふのを普通とする。

초하룻날	初一日	초이튿날	初二日
------	-----	------	-----

열일렛(十二日)
 열사흘(十三日)
 열닷(十五日)
 열엿(十六日)

초及び날を省き、簡單に左の如く謂ふこともある。

열하룻날	十一日	보름날	望日(十五日)
스무날	二十日	그믐날	晦日(三十日)
초사흘날	初三日	초나흘날	初四日
초닷날	初五日	초엿날	初六日
초일렛날	初七日	초여들렛날	初八日
초아흘렛날	初九日	초열흘날	初十日
하일로	一日	잇흘	二日
사흘	三日	나흘	四日
닷식	五日	엿식	六日
일헤	七日	여들헤	八日
아흘헤	九日	열흘	十日
열하로*	十一日	보름	十五日
금음	晦日		

日の稱呼として、なしに、日數を表はす場合も、右の호로、잇흘—を用ひる。但し보름、금음は用

日(む)の如く進

ひない。又『その日く』『日々』の意を表はすのに「날날이」(날날이의轉訛)「이ふのがある」

오늘은, 몇칠이요

今日は何日ですか

초하룻날이요

一日です

니월닷시쯤에 오겠소

來月五日頃に來ませう

뜰에 심근 나무가, 나날이, 자란다

庭に植ゑた木が日に日に大きくなる

오늘떠나면, 몇칠만에 가겠소

今日出發すれば何日目に着きませうか

나홀만에, 도착이 되오

四日目に到着します

항로건너, 단겨웁니다

一日おきに廻つて來ます

몇칠동안, 유흥실터이오

何日間御逗留のお積りですか

잇흘만잇고, 그다음에는, 다름대

二日許り居て其の次は他の所へ參る積りです

로가겠습니다

三、『今日』『昨日』なごの稱呼は左の如くである。

오늘

今日(けふ)

어제, 어저께

昨日(きのう)

그저께

一昨日(おと、ひ)

그그저께

一昨々日(さきおと、ひ)

니일*

明日(あす)

留*

*漢字音をその儘とりて音

(今日)、작일(昨日)、저작일(再昨日)など謂ふこともあり

*來日

모리

明後日(あさつて)

글피

明後々日(しあさつて)

그글피

再明後々日

三、月の稱呼は左の如く漢字音を其の儘用ゐる。

일 월 (淸월) 一月 (正月)

:이 월 二月

삼 월 三月

:사 월 四月

:오 월 五月

유* 월 六月

칠 월 七月

팔 월 八月

구 월 九月

시* 월 十月

십일월 十一月

십이월 十二月

十一月을 동짓달(冬至月)、十二月을 첫달又は 남월(臘月) (さいふ) ともある。

正音*

正音*

*第一節第二項
參照

*陽曆
陰曆

*月謝金
法

*來
月

一、三月、二た月なご、月數をいふ場合は、**하달**、**두달**の如く、數詞に달を附して謂ふのである。又月々こいふ場合は、**다달이** (달달いの轉訛) といふ。

지금 (이달이) 무슨달이오 今 (今月は) 何月ですか

양력으로논시월, 음력으로논구월 新曆では十月舊曆では九月です

이오

어니달, 어니날, 몇시에죽엇소 何月何日何時に死にましたか

식비가, 한달에얼마식이오 食費が一箇月いくらですか

월사금은, 다달이내는법입닛가 月謝は月々出す規定ですか

지난번에 (절역) 부락한일은, 시달 先達頼んだことは來月十五日までに濟まして下さい

(오느달, 니월) 보름까지맛켜주시오

지난달에, 벌치보닛소 先月こうに送りました

미월(달마다), 오원씩키금을합니다 毎月五圓づゝ貯金致します。

四、年數を呼ぶには、**일년** (一年)、**이년** (二年) の如く、普通漢字音を其の儘用ひるのであるが、二年こいふ場合こ、五年以上の場合及び何年、數年なご、謂ふ場合だけは、**잇히** (二年)、**다섯히** (五年)、**여섯히** (六年) 以下之に準ず、**몇히** (何年)、**여러히** (數年) の如く、純粹の朝鮮語で表はすことが出来る。

지금삼년급이오

今三年級です

始^始
作

獄^獄

歲^歲
拜

일년잇히만、공부히다고、무슨버

一年二年勉強したからさてろくな役が勤まるものか

슬이될수가있나

이소업을、시작할지가、뻗히느되

この事業を始めてから何年位になりますか

옛소

여러히、옥에갓춧소

數年監獄にはいました

히마다 (미년) 인구가、얼마식、

毎年人口が幾何づ、殖えて往きますか

늘어감닛가

시히에는、외비를단김니다

新年には年賀に廻ります

年の稱呼は左の通りである。

금년(今年)、올

今年

년(來年)、명년(明年)

來年

후년(後年)

再來年

작년(昨年)、상년(上年)

昨年

지작년(再昨年)、그렇게

一昨年

이듬히

翌年

第三節 助 數 詞